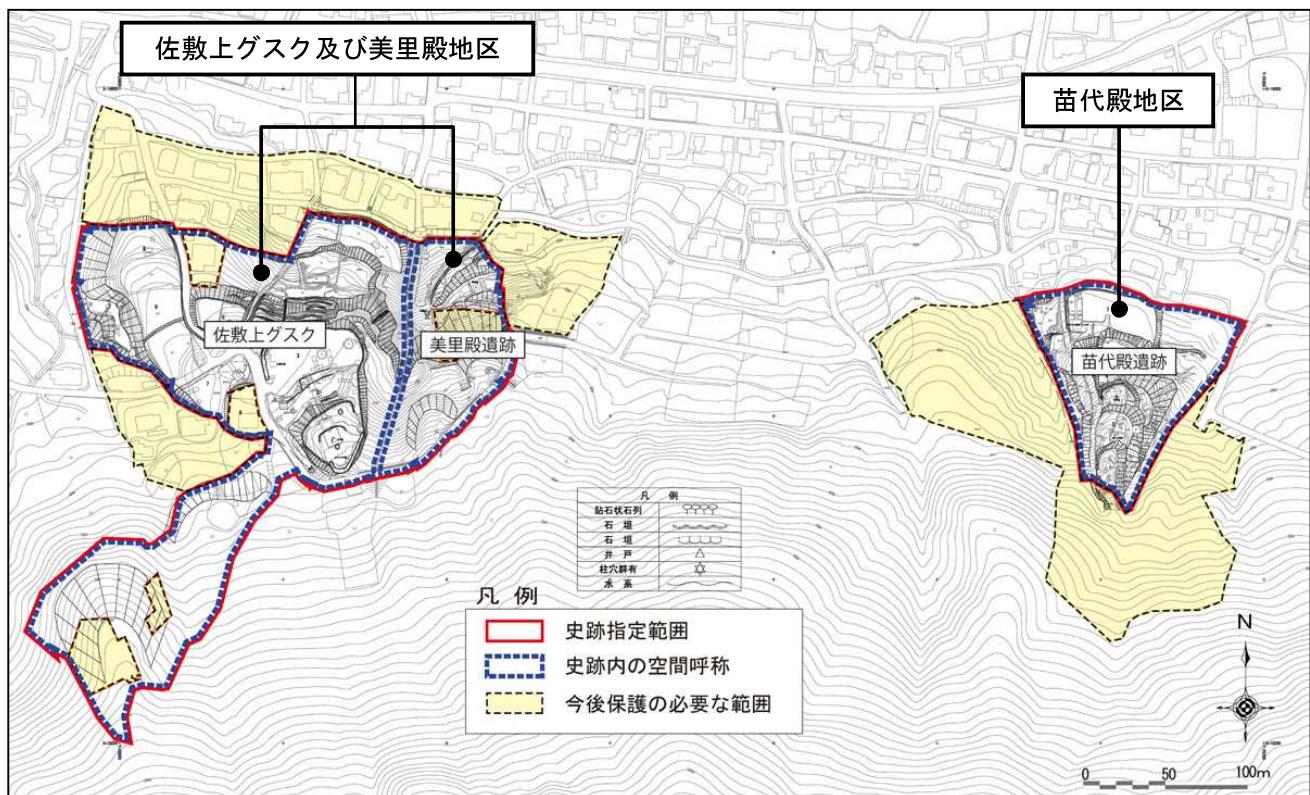


引用：史跡佐敷城跡 保存管理計画書（2016年3月 南城市教育委員会）



史跡佐敷城跡の位置図

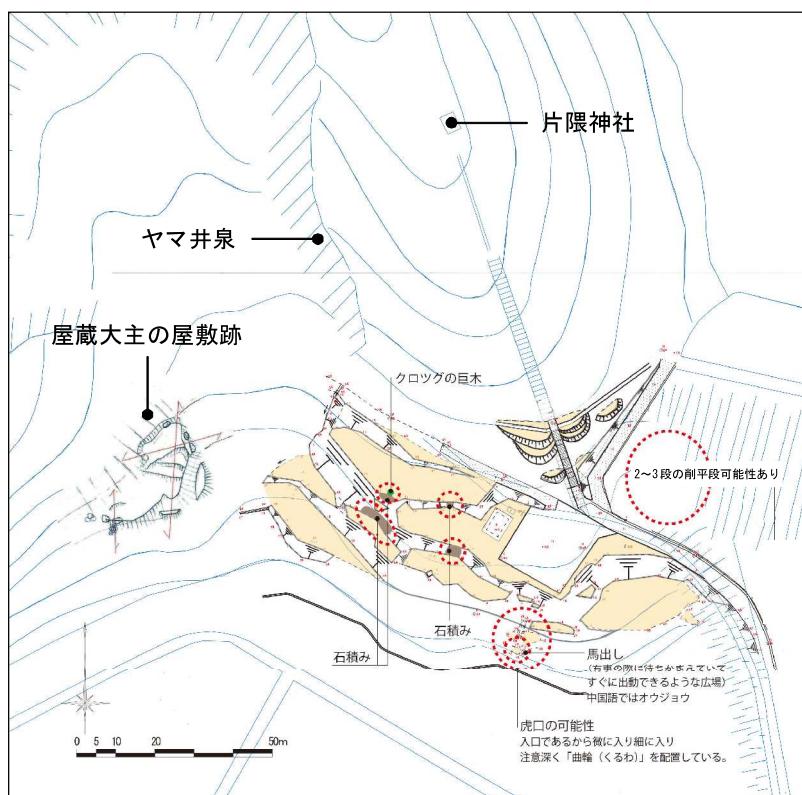


<引用：史跡佐敷城跡 保存管理計画書（2016年3月 南城市教育委員会）>

## 腰岳山頂のグスクと上里グスク遺跡



上里グスク遺跡と周辺関連遺跡（簡易測量途中）

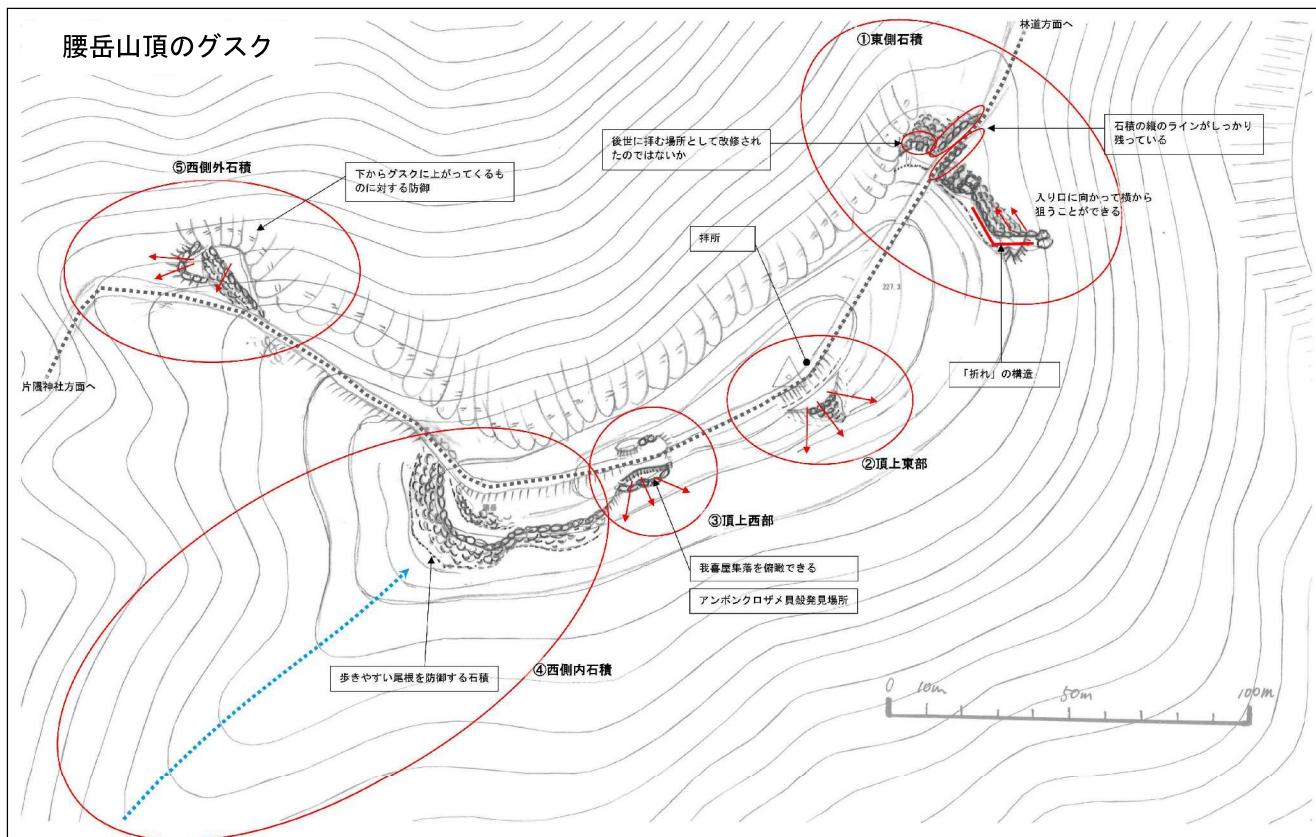


上里グスクで確認された平場と石列

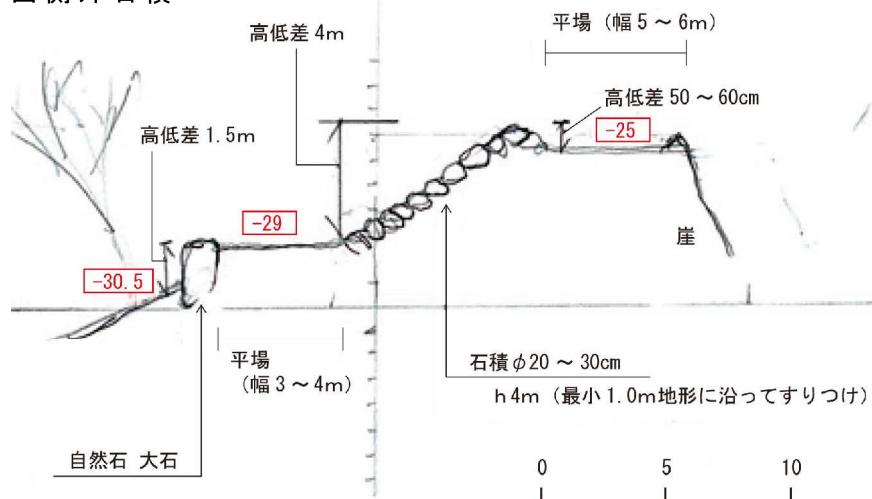


石列





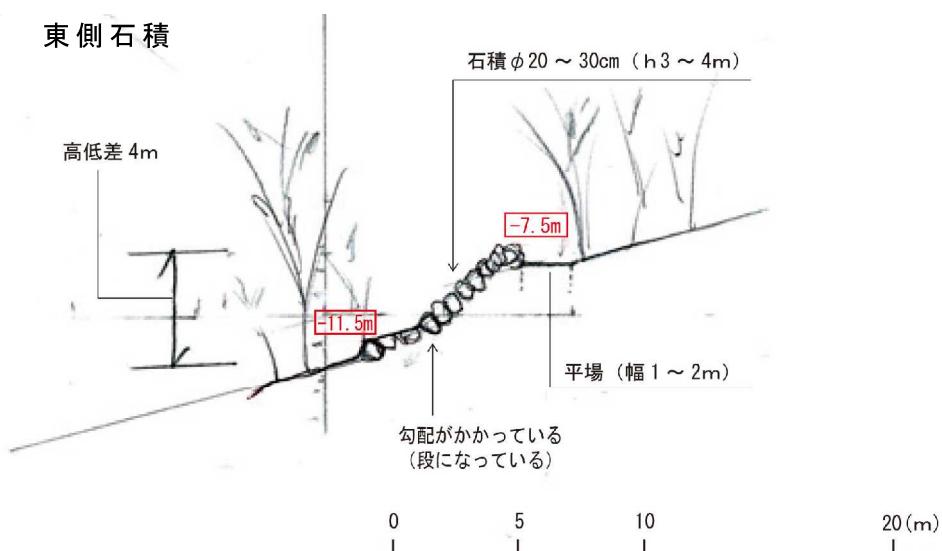
西側外石積



西側外石積



東側石積



東側石積



## 2) 関連する周辺施設等

- ・伊平屋村役場、歴史民俗資料館
- ・前泊港
- ・伊平屋小・中学校
- ・片隈御嶽入り口駐車場とトイレ
- ・腰岳遊歩道
- ・展望台

## 3) 保存活用の方針

### (1) 里海の復権に向けた環境再生

久里原貝塚の遺物散布地は、県指定された北側範囲から南側の現集落まで広がっている。前泊集落の海岸は、久里原に住んだ貝塚人にとっても重要な食料採集地であり、外との交易の場でもあった。現在の海岸線は集落との間にコンクリート護岸が築かれ、砂浜が減少し集落との関係が薄れている。久里原貝塚と里海との関連性を重視し、コンクリート護岸から親水性護岸や生態系に配慮した海岸線再生によって里海の復権を検討する。

### (2) 屋蔵大主に関わる上里遺跡と蔵屋敷跡、片隈御嶽等の遺跡調査

周知の遺跡である上里遺跡周辺から、防御を意識した段状平場の縄張りが確認された。場所は片隈御嶽（片隈神社）や遊歩道の起点となる駐車場やトイレが整備されている周囲で、その斜面と片隈御嶽に向かう階段の周囲などに人工的な平場が分布している。さらに、屋蔵大主の伝承に関わる蔵屋敷跡は西側山裾にあり、古井戸ヤマ井泉（ヤマガ）も近接している。屋蔵大主関連遺跡の解明に向け、上里遺跡をはじめ周辺の遺跡調査の実施を検討する。

### (3) 腰岳山頂のグスク遺跡調査

腰岳では山頂部と南側斜面の石積み遺構がグスク遺構として確認したが、村史などでは腰岳のグスクに触れられていない。地形から推測すると遺跡範囲は拡大する可能性があり、グスクへの道や山裾の上里遺跡、片隈御嶽等との関連性を視野に入れた遺跡調査を実施する。

### (4) グスクと御嶽の関連調査

腰岳山頂のグスクは上里遺跡と立地上の関連が深く、屋蔵大主の築城とも推測される。これらの点から遺跡の全体像を明らかにしながら、御嶽との関連も調査検討する。

### (5) 遺跡調査に向けた実施体制の強化と村民の協力

遺跡調査に向けて伊平屋村教育委員会の体制を強化しながら、専門家の指導のもとに実施方針と遺跡調査計画を作成する。調査を実施する上では、村の老若男女が参加する遺跡調査の仕組みを作り、「島の誇り：琉球国の兆し」プロジェクトとして検討する。

### (6) 遺跡調査に基づく文化財指定

我喜屋の遠目番と野甫のチジ石、賀陽山の火立て屋は、先島諸島も含めた狼煙台によるネットワークと関連する遺跡として国指定史跡の価値があると言われている。

腰岳周辺の上記遺跡について遺構調査を実施しながら史跡指定を行い保全を進め、地域づくりや観光を視野に入れた活用策を検討する。指定に向けては、田名城やヤヘーグスク、賀陽グスクなど他のグスクと一体となった伊平屋島グスク群指定は、活用の幅を広げるものである。

### (7) 環境整備やイベントとの連携、地域づくりへの展開

片隈御嶽（片隈神社）の南側はダム整備の土取り場となって崩壊が進み、歴史的環境が改変を受けている。一方、腰岳には頂上への道や展望台など遊歩道が整備され、伊平屋ビレッジトレインが実施されている場所もある。屋蔵大主の遺跡群の解明を進めながら環境の再生や歴史文化のテーマを持ったビレッジトレインなど、腰岳の歴史文化を活用した地域づくりを検討する。

## 琉球国の兆し 保存活用区域の方向



### 3. 大田名節に詠われる美しいシマ

#### 1) 歴史文化資源の概要

##### (1) 田名城を腰当とした集落立地環境

田名の集落は北側に田名城と後岳を背負い、集落の前方東側前岳と西側アサ岳に挟まれた沖積地に広い田畠と田名グムイがある。集落は南斜面に立地し、水田や田名グムイを超えて遠く前泊まで見通すことができる場所である。大田名節には田名グムイの浮島やユナ道、アサ道の恋歌などが詠まれている。

##### (2) 聖地に守られたシマ

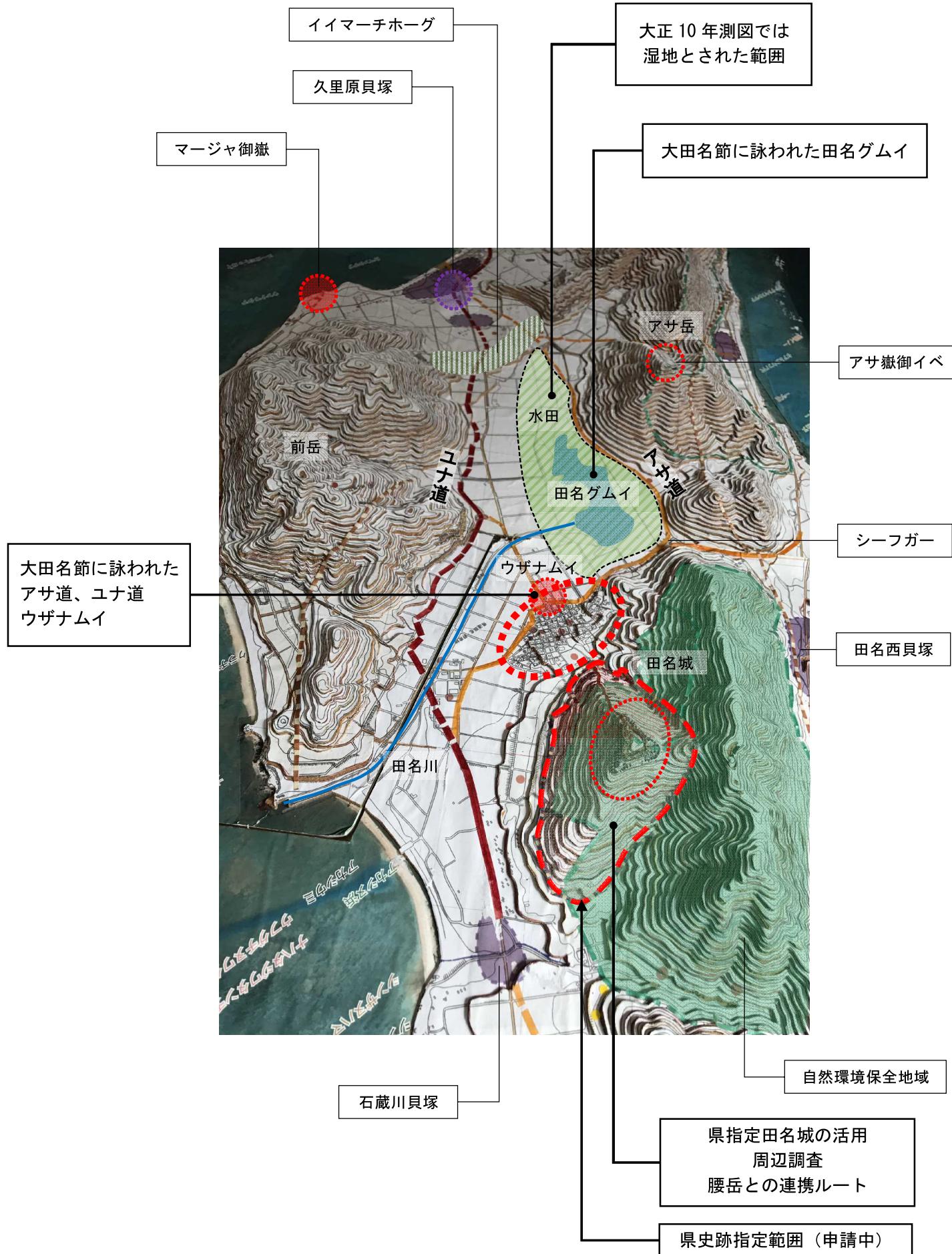
田名の聖地を代表する御嶽は、田名城内にあるグスク御嶽、クバ山の三崎御嶽、前岳の南海岸に面するマージャ御嶽、アサ岳頂上のアサ嶽御イベなど、田名を取り巻く山々や海沿いの要所に位置している。また、子孫繁栄を祝うシヌグや集落内の古井戸、火の神、畠の神トゥントゥクなど、集落が拝所とする多くの場所がある。

##### (3) ウンジャミなど継承されてきた神事や伝統行事

田名は広い水田を有し、季節ごとの行事や豊年祭など伝統的な稻作文化の年中行事が盛んである。旧暦7月17日に執り行われているウンジャミは、田名殿内に白装束で勢ぞろいした神女（ハンズナー）が、殿内での豊漁祈願やフナウクイ（船送り）、マジキナヌハンターに移動して神送り、さらに明石の海岸での神送りと一連の儀式を行うもので、田名の神事を代表している。



## 歴史文化資源の概要



#### (4) 石蔵川や二又川河口の貝塚遺跡と自然

田名の貝塚遺跡は東海岸に2箇所あり貝塚前期と後期の遺物が出土している。石蔵川上流には西海岸を見通すことのできるタンメー岩があり、後岳やタンナ岳に登る尾根道筋がある。貝塚遺跡付近には旧ガジナ村が位置していたと推測され、田名集落の歴史を探訪できる場所である。

#### (5) 東海岸の旧ガジナ村

琉球国惣絵図は18世紀の半ばの伊平屋島・野甫島の地図で道や集落、杣山、海岸線などの状況が描かれている。田名では、田名グムイ、田名川、アサ道、田名村と書かれた集落が2箇所、後岳やタンナ岳、クバ山は一連の杣山（ソマヤマ）として表現されている。惣絵図では現在の田名集落は見えず、惣絵図以降に現在の田名集落に合流したと推測される。

#### (6) 伊平屋島杣山竿入帳と山の資源

琉球国惣絵図に見るように伊平屋島の山々は王府時代に杣山（一番～五番）として管理され、田名の五番杣山は後岳からクバ山までの最も広い範囲を占めている。県内では唯一残った「伊平屋島杣山竿入帳」には、杣山を竿入り測量した際に設置した印部石などの場所や測量の経緯が分かる情報が記録されている。判読・作成した図面を基に現地で印部石等を探したが、特定はできていない。石蔵川沿いには木材を運んだ馬道が残り那覇口（ナファグチ）は沖縄本島に向けヤンバル船が出入りした場所と言われている。

#### (7) 伊平屋島の念頭平松

国の天然記念物に指定された伊平屋島の念頭平松はおよそ280年前に植えられたとされ、横に大きく枝を伸ばした琉球松の美しさは大田名節にも詠われている。惣絵図作成時代と植えられた時代は同時代で、惣絵図に書かれた昔の伊平屋島で育ち、現在に至るまで田名の歴史を見聞した松である。

琉球国惣絵図に書かれた田名

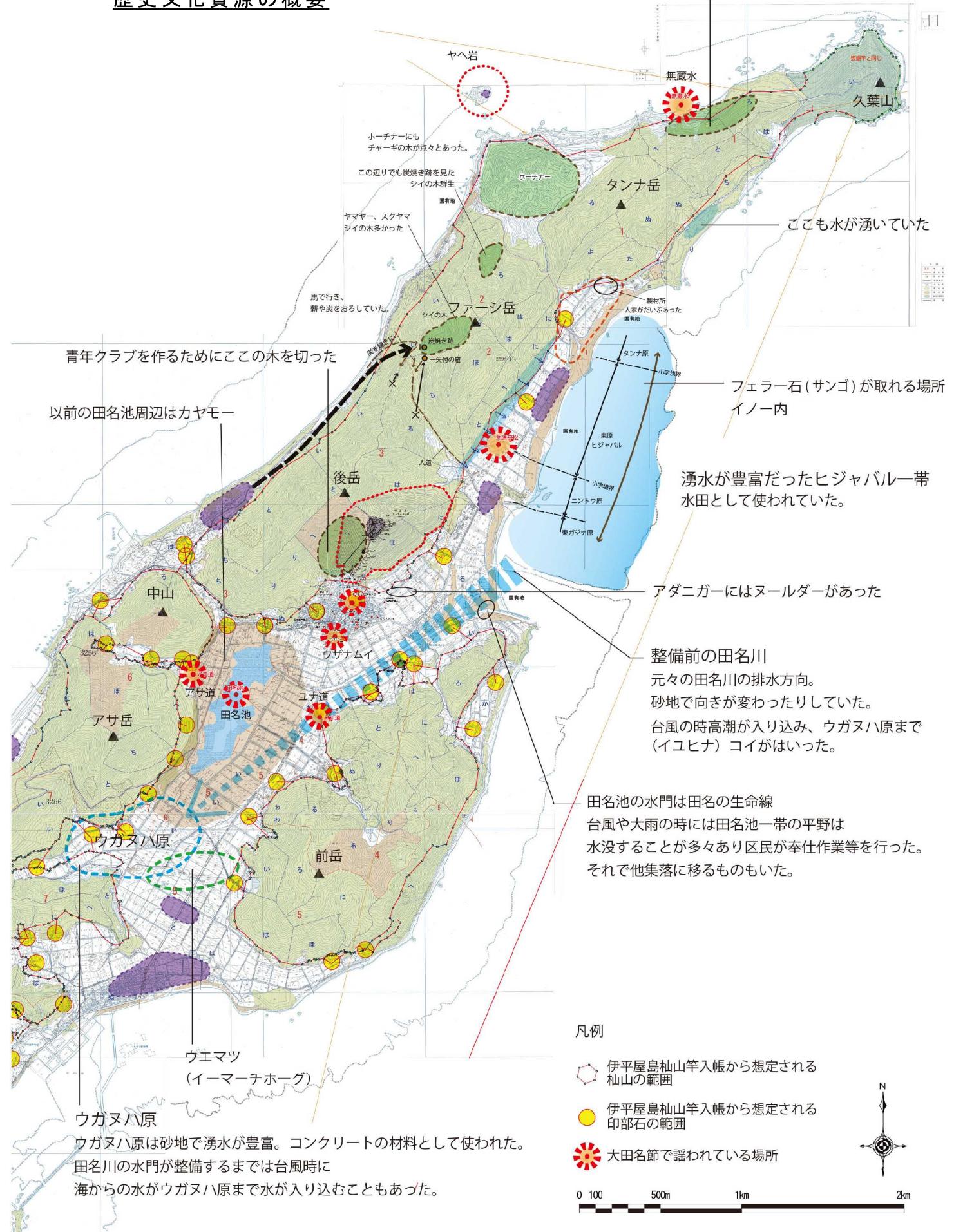


## 2) 関連する周辺施設等

- ・田名公民館と共同売店
- ・念頭平松公園

## 聞き取り情報等から得られた 歴史文化資源の概要

この辺りにもチャーギがあった



### 3) 保存活用の方針

#### (1) 田名城と後岳の関連遺構調査実施

県指定史跡として申請中の田名城は城郭内部はもとより、その背後の後岳や旧ガジナ村側からのグスク進入路など、グスク縄張りと関連する環境について遺構調査を実施する。

#### (2) 田名の集落歴史文化巡りとガイドブック、島人案内

田名城を腰当（クサテ）にした田名集落には、歴史文化を今に伝える多くの集落資源が点在している。ウザナムイや共同売店、公民館周辺を起点として田名屋やノロ殿内、数多くの井泉、3体の魔除けシーサー、ウンジャミに縁のある場所や路、大田名節を彷彿とさせる高台からの水田や田名グムイ、アサ道・ユナ道の風景など、集落巡りは魅力である。集落歴史文化ガイドブックや島人案内など、集落資源の保全活用に向けた企画や仕組みを検討する。

#### (3) 伝統芸能保存会との連携

念頭平松が国指定天然記念物になった際に、念頭平松を背景に祝賀会が開催された。念頭平松を歌った大田名節を現地で演奏した企画は臨場感が高いものである。有形無形の文化財が一体となり保存継承・活用を図っていく企画や場の整備を検討する。

#### (4) ウンジャミの保存継承とウンジャミ路

田名を代表するウンジャミは神事に携わってきた人たちからの聞き取り調査や撮影などの記録を行ない、保存継承に向けた検討を行う。また、後継者不足で存続が危ぶまれている現状に対しては、文化財としてのウンジャミの保全継承に向けた方策や支援などを検討する。

ウンジャミは白装束の神女（ハンズナー）が殿内での豊漁祈願やフナウクイ（船送り）をし、マジキナヌハンターに移動して神送り、さらに明石の海岸での神送りと移動しながら行う神事である。旧暦の7月17日以外でも、神事を行う各々の場所と移動ルートを辿りながらウンジャミを解説できるウンジャミ路として表現し、保存継承と活用を高める仕組みや整備を検討する。

#### (5) 大田名節に詠われた田名グムイの保全・修景

田名集落の南に広がる田名グムイは周辺の土地改良が進み湿地面積は減少してきた。現在では大田名節に詠われた田名グムイの様子は見られないが、水面や浮島の有無などを調査しながら田名グムイの修景保全を検討する。

#### (6) 歌碑

沖縄では歌碑巡りが盛んで、大田名節などの歌碑がアサ道近くや念頭平松公園に設置され来訪者から楽しめている。田名や伊平屋の美しさを歌った琉歌などの歌碑を所縁のある場に設置し、歌碑を巡りながらシマの魅力を伝える企画を検討する。

#### (7) 国指定念頭平松と県指定（申請中）田名城と五番杣山の山地及び東海岸を連携した活用

田名城と念頭平松は近い位置にありながら連携した利用がなされていない。念頭平松を起点として田名城や後岳、タンメー岩、タンナ岳などを含めた歴史や自然、風景をテーマとした遊歩道などを検討し、二つの指定文化財を連携した活用を検討する。

#### (8) 杣山竿入帳の測量に関する調査

伊平屋島の山々は杣山として王府時代に管理されたが、その杣山政策と杣山を測量する技術について調査研究ができる現場が村有林として現存している。杣山の最も広い山は田名にあり、戦後も薪炭をヤンバル船で那覇に運搬したという場所やサンゴ礁の切れ目の那覇口（ナファグチ）がある。京都大学が所蔵する「伊平屋島杣山竿入帳」の返還や、専門分野の研究者が杣山現地で調査研究できる機会や仕組みを検討する。

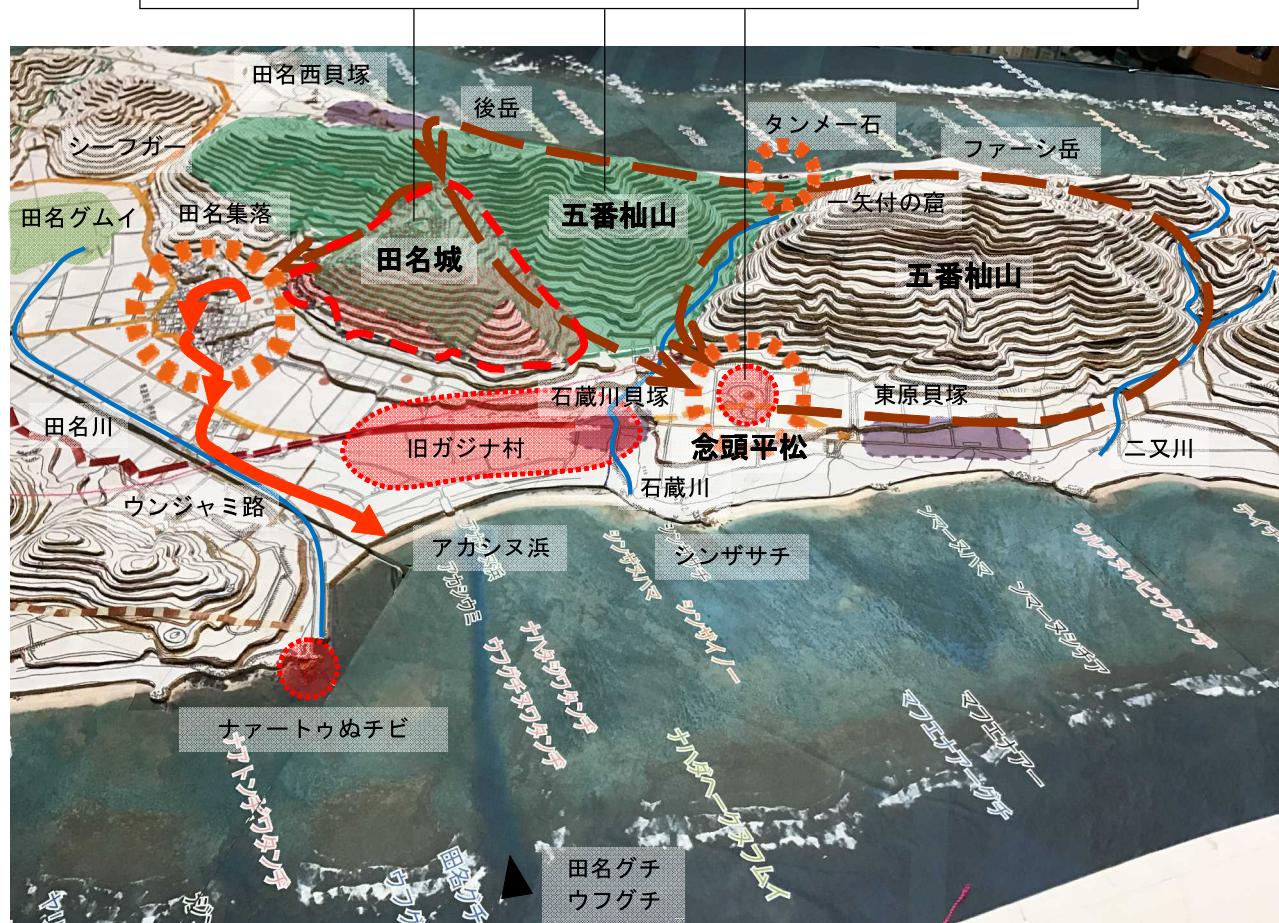
## 大田名節に詠われる美しいシマ 保存活用区域の方向



ウンジャミ行事の様子



国指定念頭平松と田名城と五番榎山の山地及び東海岸を連携した保全活用



## 4. 漁労文化が息づく島尻

### 1) 歴史文化資源の概要

#### (1) 賀陽山と阿波岳に守られたシマ

島尻は賀陽山と阿波岳に挟まれた海岸に面した集落で、貝塚時代からグスク時代にかけての遺跡地が重なる場所である。集落の西側には田畠があるが田名、我喜屋と比較すると農地面積が狭い。

#### (2) 良好な漁場に恵まれた里海

島尻前面には裾礁（キヨショウ）型のリーフがよく発達しており、サンゴ礁礁原の幅はおよそ2kmに達する。そのため追い込み漁法の数多くのアミシー（網）やクチ、ワタンジなどの海名が付けられており、島尻は漁業が最も盛んな集落である。1702年に作成された元禄国絵図（1697年から作成～1702年に完成）では、島尻の港から北の硫黄鳥島へ向けた航路と、南には本部半島、那覇向けの航路が描かれており、島尻の港は広域の交易港としても機能していたことが推測される。

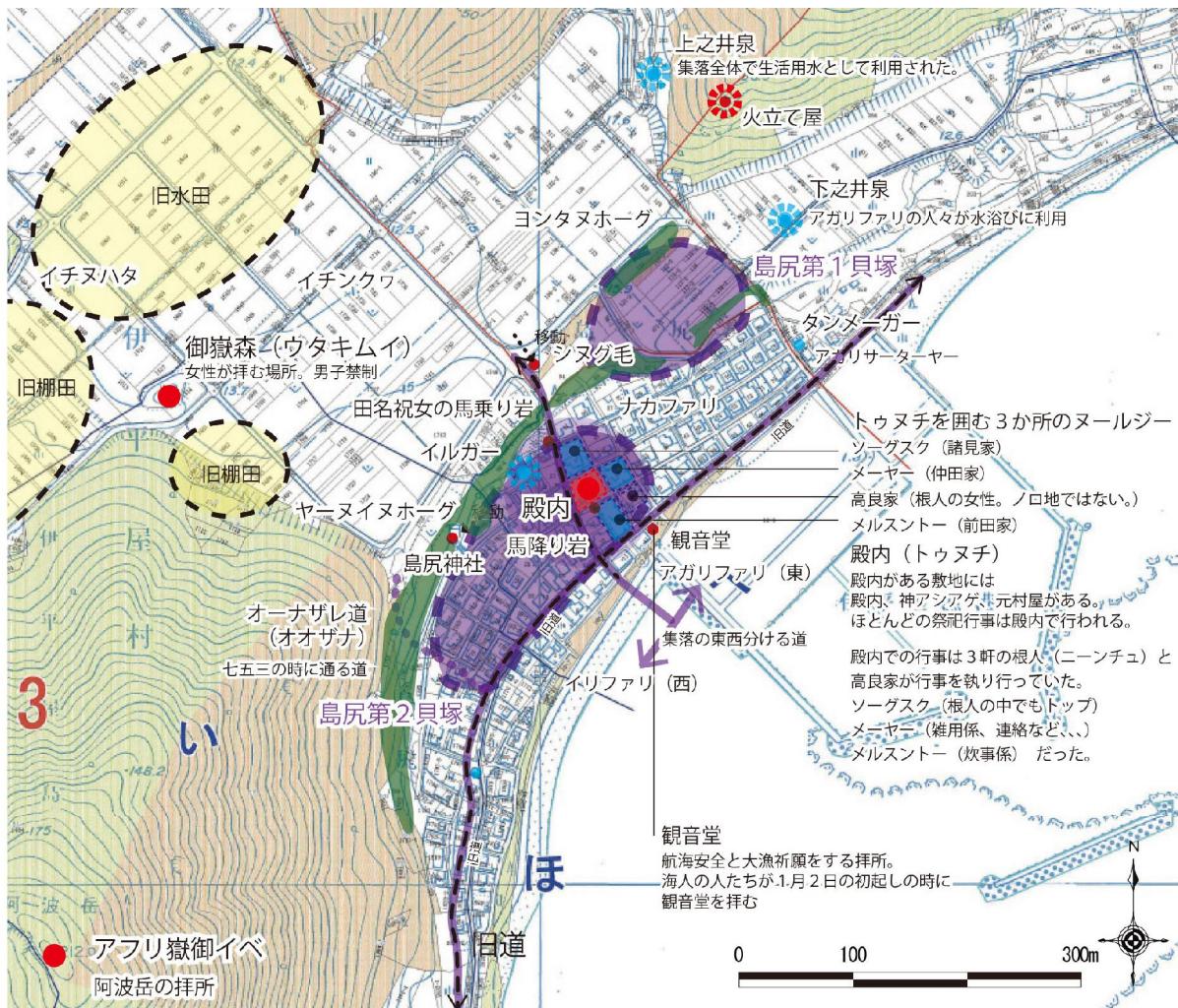
#### (3) 朝鮮半島の影響がみられる賀陽グスク

集落背後の賀陽山は294mと伊平屋島では最も高く、石積みと井戸が確認され賀陽グスクと名付けられた。このグスクは田名城と同様にチャートの岩質上に築かれ、虎口（コグチ）は甕門（オウジョウ）様式に近い形態が見られるなどグスクの形態としても特徴を持つ。グスクへのルートは島尻集落側からは火立て屋を通りながら山頂に登り、我喜屋側よりもルートがわかりやすい。

#### (4) 集落の中に位置するトゥヌチとアシアゲ

島尻集落内には神アシアゲを始め、サンゴ石で囲まれた歴史的佇まいを保持する家屋敷が多く、阿波岳や海と一体となって伝統的な集落景観が形成されている。

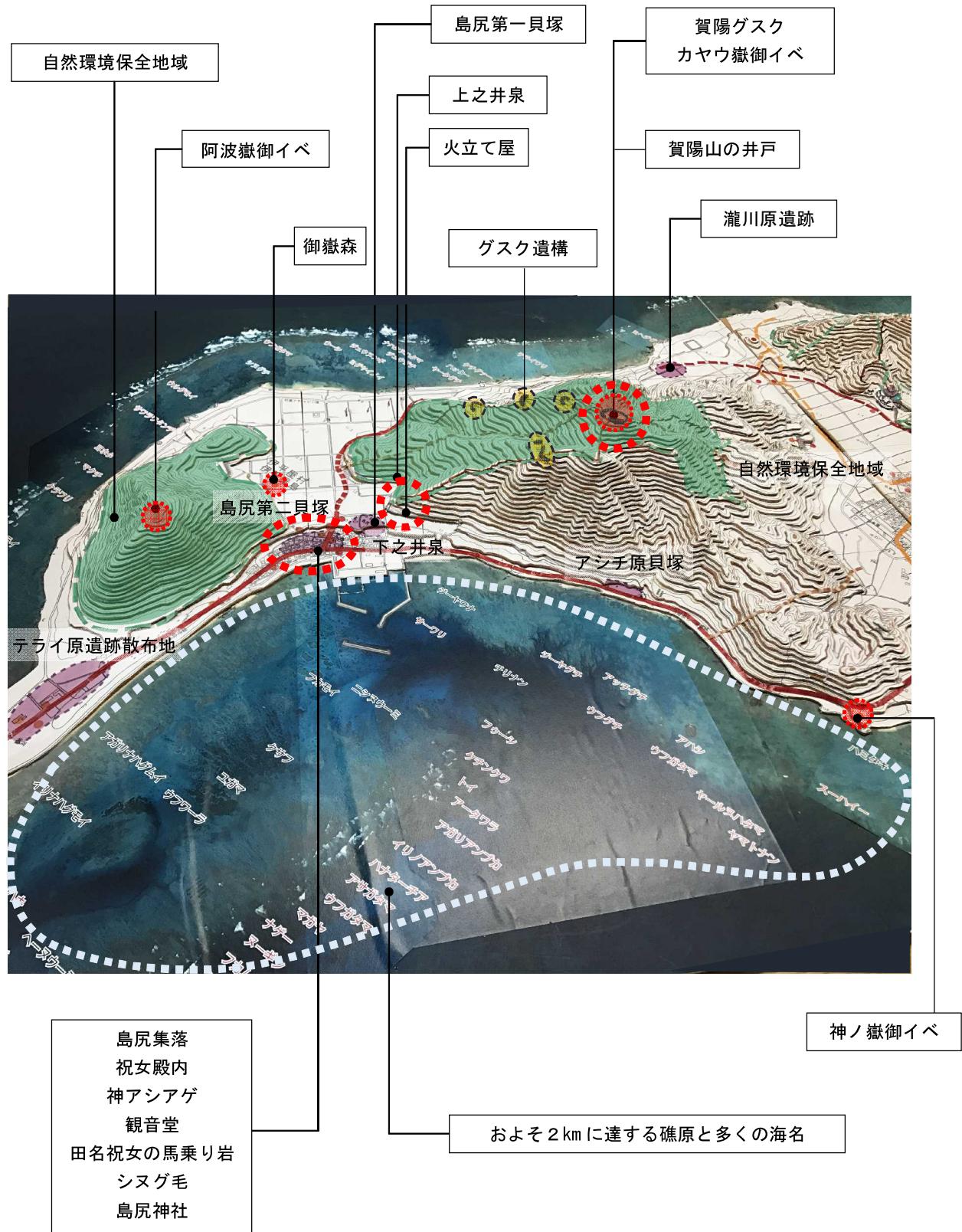
### 歴史文化資源の概要



## (5) 我喜屋からの分かれ

賀陽山はカヨウ嶽御イベの名を持つ拝所で、長らく我喜屋と島尻の両集落が年中行事としての賀陽山の山ナジを実施してきた。島尻は我喜屋からの分かれと言われ、関連性が深い両字である。

### 歴史文化資源の概要



## 2) 関連する周辺施設等

- ・共同売店と広場
- ・島尻漁港

## 3) 保存活用の方針

### (1) 海名と漁労研究

島尻は伊平屋村の中で最もリーフ奥行きが深く、裾礁には追い込み漁の網を張った海名がつけられている。一方、沖縄本島の本部を対象としたサンゴ礁地形や海名などの調査研究がなされており、伊平屋村でも同様の調査が実施されている。島尻の漁労文化の継承を図りながら調査研究成果を生かしたガイドブックの作成や学校教育における伝統漁法の体験などの実施を検討する。

### (2) 集落文化的景観の保全や修景

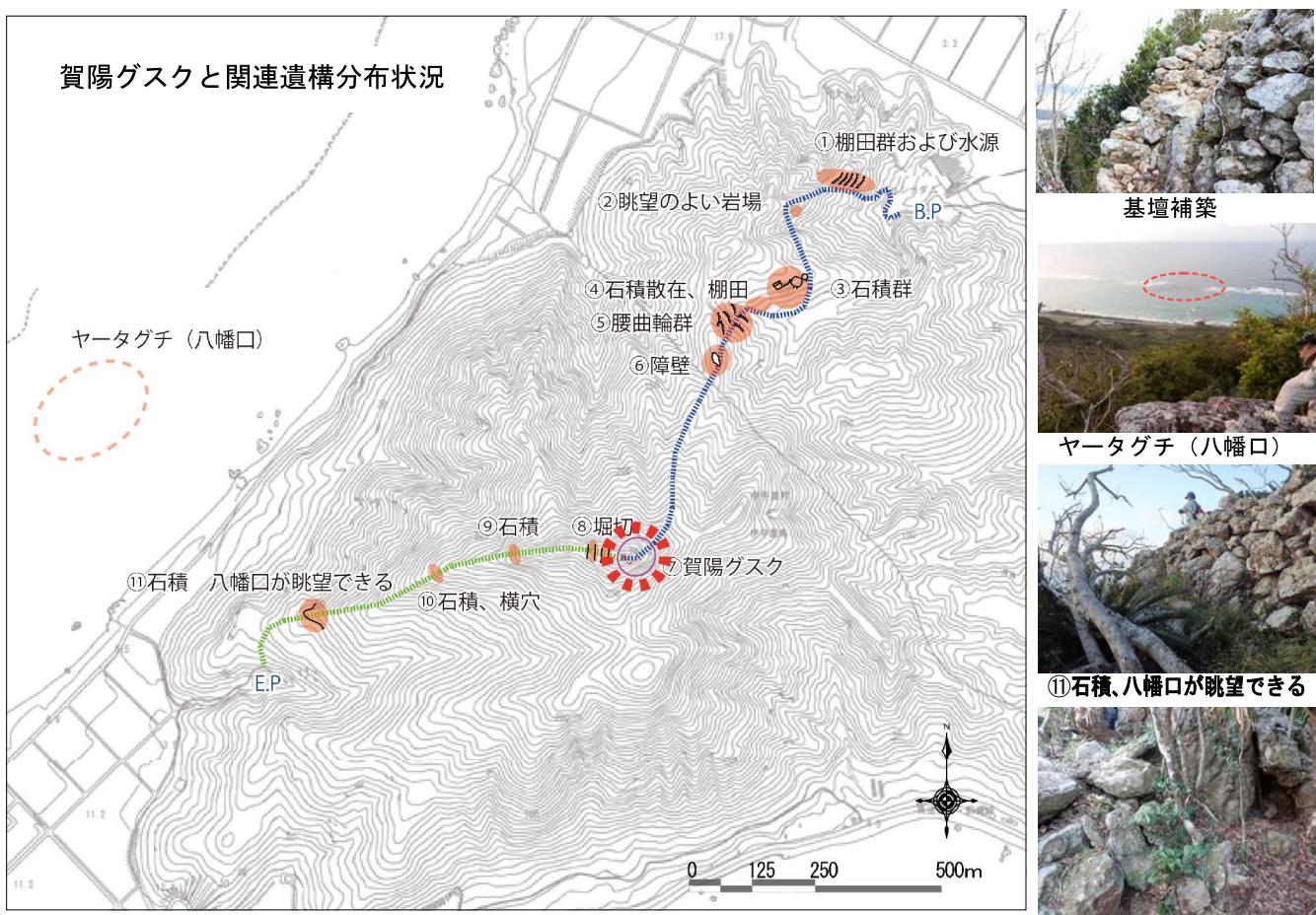
島尻はアシアゲやトウヌチが集落の中心に位置し、ここでは毎月1日と15日に行うウチャトウをはじめとした多くの年中行事、豊年祭には棒術、テルクグチ、踊りなどが演じられる。かつて集落に連続していたサンゴ石積みを復活させながら、他集落には見られない有形無形の歴史文化を保全し伝統的集落景観の向上を図るような取り組みを検討する。

### (3) 賀陽山グスクと関連遺構調査

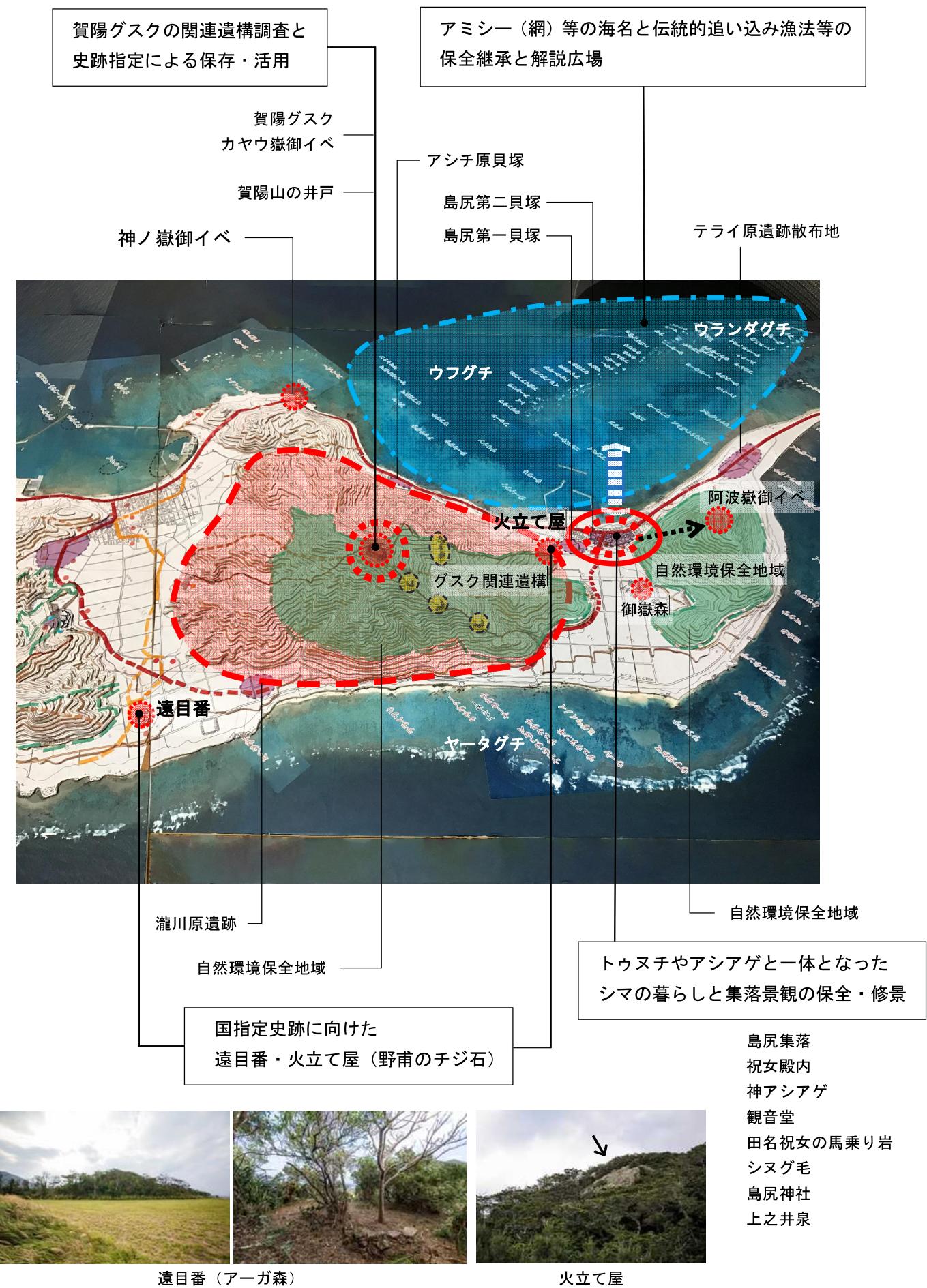
賀陽山は頂上部に井戸があることが知られていたが、朝鮮半島の影響を受けた城郭に包围されたグスクであることが判明した。賀陽山に登る途中には石積みや堀切などが点在しているが、全容は今後の遺跡調査によって明らかにされる必要がある。その上で、グスク保全に向けた指定や活用計画を検討する。

### (4) 国指定史跡を目指す火立て屋

賀陽山の東麓の火立て屋は腰岳の西側麓の遠目番と野甫島のチジ石と共に、海上を通る船の情報を狼煙によって中央に連絡した機能を持つ遺跡である。これらの遺跡は国指定史跡としての価値が認められており、指定によって保全しながら賀陽グスクや遠目番、チジ石とともに今後活用を検討していく。



## 漁労文化が息づく島尻 保存活用区域の方向性



## 5. 聖なる原風景のシマ

### 1) 歴史文化資源の概要

#### (1) 石灰岩のシマの成り立ち

野甫島はサンゴ礁で囲まれた小さな島で、砂浜が続く北海岸、黄金ソテツやサンゴ群落が確認された西海岸、フィーフィー伝説が残るジューマ東海岸、集落と港が立地する南側からなる。

野甫島の地質は砂が堆積して層理が見られる石灰岩低島で、高島の伊平屋島とは自然も土地利用、生活環境、風景も大きく異なっている。島東南部段丘上には貝塚時代前期から後期、グスク時代にかけた遺跡地区が分布する。立地環境の異なる二つの島で見られる歴史文化が興味深い。

#### (2) 厳しい水資源と共同井戸

水資源が乏しい石灰岩の野甫島では、集落から離れた4箇所の共同井戸を飲料水やその他の使用水に使い分けをしていた。集落から西に1kmほど離れた御産土井戸（ウフマーガー）は区民が並んで水を汲んでいた飲料用の井戸で、北側農地にある後ぬ井泉（クシヌカー）は飲料以外の使用水である。

#### (3) 段畑とソテツ

集落北西に広がる畠は地形に合わせて小区分され、段状の畠周囲にはソテツが散在する。伊平屋島の低地に広がる農地景観とは異なり、野甫島の砂質系石灰岩と地形を生かし小刻みに区画された農地は、野甫島を特徴付ける文化的景観である。また、農地周辺に散在するソテツ群は飢饉など食糧難の際に食され、生活が厳しかったシマの歴史を物語っている。

#### (4) 石の文化

野甫島の砂質系石灰岩は加工が容易な石材で、島から切り出された石は伊平屋島に小舟で運搬し米と交換しながら墓石などに使用された。石切場は海岸沿いや内陸に分布し、場所によって質が異なる石材を使い分けた。屋敷石積みや亀甲墓などは野甫島独特の石造文化である。

#### (5) 狼煙を上げたチジ石

伝承で伊是名に向けて狼煙を上げたと言われるチジ石は、チャートでできた屹立した岩である。島の南海岸には複数のチャート岩があり、チジ石近辺は質の違う2種の石灰岩（18,000年～700,000年前）とチャートとが混在し、2億5千万年から数万年の地質時代が共存する興味深い場所である。

チジ石は腰岳西南端の遠目番と賀陽山南東端の火立て屋とともに、就航する船の情報を狼煙で中央に伝えるネットワークに組み込まれていた場所と言われている。

#### (6) 年中行事を受け継ぐ集落

野甫島には貝塚時代前期から後期、グスク時代にかけて島の東南部段丘上に遺跡地区が分布する。グスク時代の遺跡地区は集落背後のグンサナ森と呼ばれる場所で御嶽とヒルフ井泉がある。現集落は貝塚時代の遺跡地区と重なり、集落は中央のナカスジで東西の組に別れる。東組のハンタ毛では十五夜の祭りを行う。

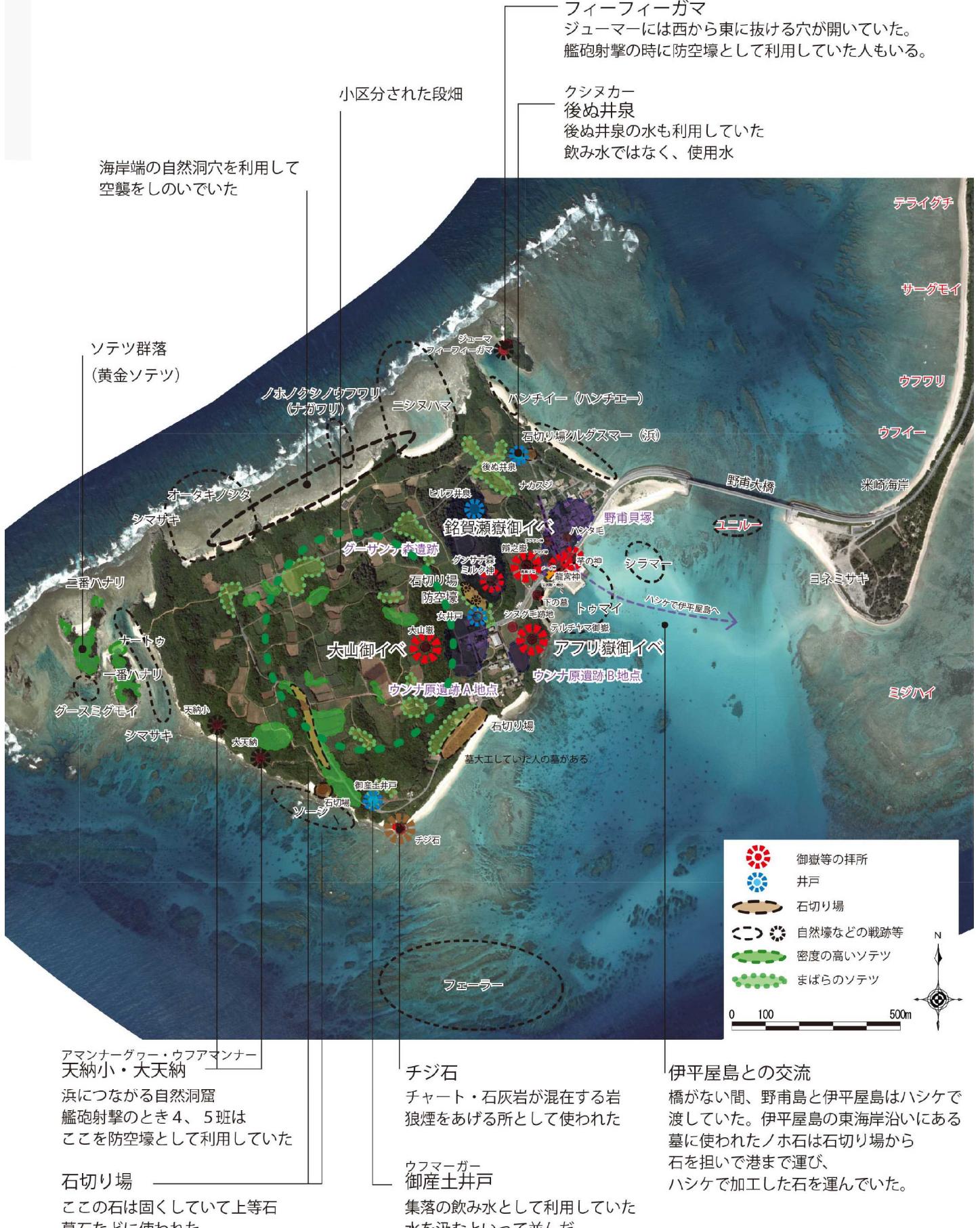
#### (7) 聖なる島

西組にあったヌフヌシ神とアマイ神、メーイ神の3つの守護神は、辨之嶽に合祀された。小高い山のグンサナ森にはミルク神、そして琉球国由来記に記載された大山御イベ、テルチヤマ御嶽（アフリ嶽御イベ）、辨之嶽（銘賀瀬嶽御イベ）は公儀祈願所である。また、港の近くには龍宮神と芋の神が祀られている。このように野甫島は多くの神々に守られた聖なるシマである。

#### (8) 戦跡

野甫島には戦争中に村民が隠れるために使用した自然壕や掘った壕などの戦跡がある。また、戦争終了後に鹿児島県の知覧から飛び立ち伊平屋沖で墜落漂流していた元日本兵が村民に助けられ、後に野甫島に移住し仲間の慰靈も込めて墜落した位置を遠望できるグンサナ森に住宅を建てた。御嶽に隣接する元日本兵の住宅や避難壕など、戦争に関連する歴史を語ることができる場所がある。

## 歴史文化資源の概要



## 2) 関連する周辺施設等

- ・野甫大橋
- ・展望台
- ・共同売店
- ・辨之御嶽前の広場

## 3) 保存活用の方針

### (1) 砂質系石灰岩と文化的景観の調査と活用

野甫島の層理が見られる石灰岩について、古砂丘やアワ石とも言われるが成り立ちは判明していない。島の成り立ちとともに墓や屋敷囲などの独特的な石造文化を作り出している石材でもある。また、チジ石のようにチャートなどが混在した岩が歴史的要所になっており、野甫島の地質解明は課題である。

一方、農地も同様な地質を基盤としており、小刻みな農地の区分や直立段差の段畑形状、ソテツ植栽など他に類の無い農地景観を呈している。北側の農地では土地改良が進み農業の効率化が図られているが、野甫島の農地を文化的景観の視点から調査して資源価値を探り、今後の土地改良事業などとの整合性を図る上の検討課題である。

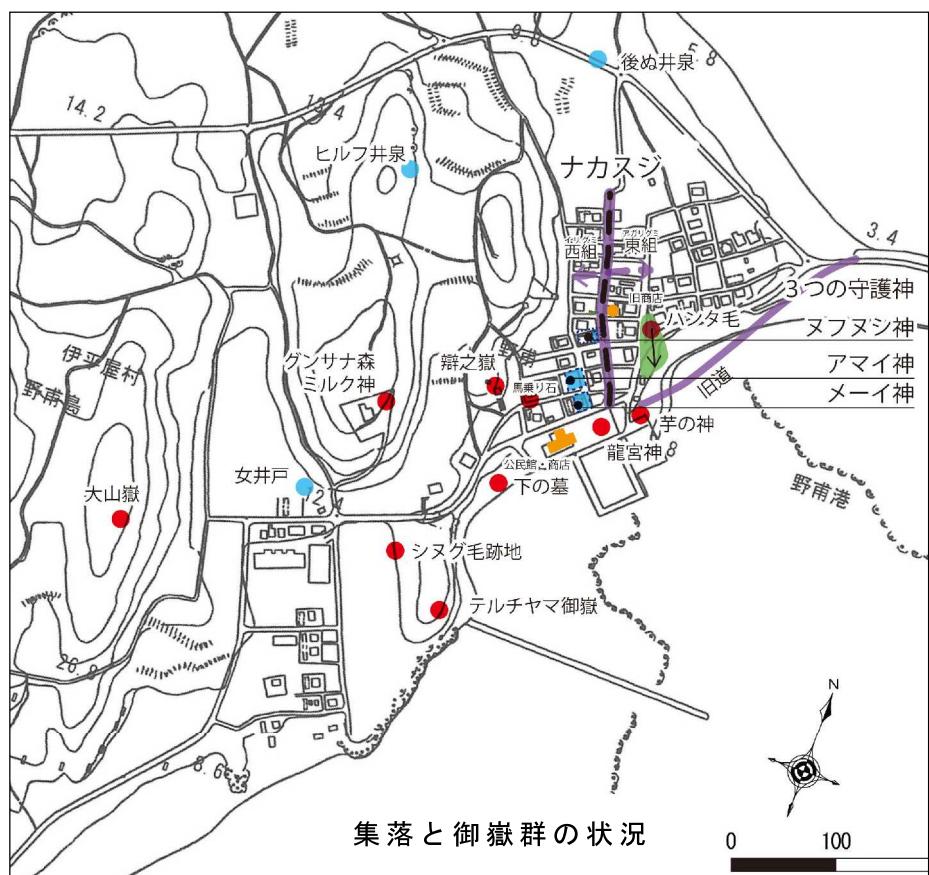
### (2) 国指定史跡の価値を持つチジ石と周辺の保存活用

先島諸島遠見番所跡群は、江戸幕府の1644(順治元)年に海上交通の監視・通報(烽火)機能をもつた場所で、対外関係と鎖国体制の完成を示す遺跡として国指定史跡になった。

野甫島のチジ石は伊平屋村の腰岳遠目番と賀陽山の火立て屋とともに同様の機能を担っていたと言え、国指定に向けた検討を行う。

### (3) 浜巡り、島巡り、集落巡り

野甫島には島を取り巻く海岸に、黄金ソテツやサンゴ群落が見られる西の景勝地、チジ石や御産土井戸(ウスマーガー)、石切場がある南の海岸、フィーフィーガマがあるジュー馬と浜などがあり、島の東南部に集落と港、集落西側の丘陵に御嶽群、島中央の農地など、自然や歴史文化と関連深い場所が多い。これらの要所をゾーンとして捉え、浜巡り、島巡り、集落巡りしながら野甫島の魅力に触れる仕組みや整備を検討する。



## 聖なる原風景のシマ 保存活用区域の方向

### 砂質系石灰岩と文化的景観の調査と活用

海岸端の自然洞穴を利用して空襲をしのいでいた

### 浜巡り、島巡り

ソテツ群落  
(黄金ソテツ)



アマンナーグワー・ウファマンナー  
天納小・大天納

浜につながる自然洞窟  
艦砲射撃のとき4、5班は  
ここを防空壕として利用していた

### 石切り場

この石は固くしてて上等石  
墓石などに使われた。

### 国指定史跡の価値を持つチジ石と周辺の保存活用

### フィーフィーガマ

ジユーマには西から東に抜ける穴が開いていた。  
艦砲射撃の時に防空壕として利用していた人もいる。

### クシヌカー 後ぬ井泉

後ぬ井泉の水も利用していた  
飲み水ではなく、使用水

### 浜巡り、島巡り

### 集落巡り



チジ石  
チャート・石灰岩が混在する岩  
狼煙をあげる所として使われた

フェーラー

ウフマーガー  
御産土井戸

集落の飲み水として利用していた  
水を汲むといって並んだ



御嶽等の拝所

井戸

石切り場

自然壕などの戦跡等

密度の高いソテツ

まばらのソテツ

0 100 500m



### 伊平屋島との交流

橋がない間、野甫島と伊平屋島はハシケで渡していた。伊平屋島の東海岸沿いにある墓に使われたノホ石は石切り場から石を担いで港まで運び、ハシケで加工した石を運んでいた。

## 第5章 保存活用に向けた課題

### 1) 村民への歴史文化基本構想の周知

策定された「伊平屋島・野甫島歴史文化基本構想」について、次年度以降に村民を対象とした説明会や専門家の指導のもとの現地踏査や観察会などを実施して村民に構想を周知する事が重要である。周知に向けた方法は以下のような企画が想定される。

- ・広報誌の活用
- ・5集落の説明会
- ・小中学校における説明会
- ・グスク観察会
- ・島の成り立ち観察会

### 2) 遺跡調査の実施と推進体制の強化

伊平屋村の歴史文化基本構想の主テーマである「琉球国の兆し」を際立たせる上で、腰岳や上里遺跡、賀陽山などのグスク関連遺跡調査を実施することが重要な課題である。そのためには組織体制の強化と同時に考古学研究者の當眞嗣一氏を中心に、3名程度の委員からなる検討委員会を発足させ、指導のもとに遺跡調査に向けた取り組みを検討する。

遺跡調査の候補は周知の田名城やヤヘーグスクをはじめ、文化財悉皆調査で発見された賀陽グスクや腰岳山頂のグスク、さらに上里遺跡のグスク等と周辺の関連遺跡を重点化する。とりわけ、右図の「琉球国の兆し」保存活用区域については遺跡調査を優先する。

#### (1) 遺跡調査を指導する検討委員会の発足

伊平屋島・野甫島の文化財悉皆調査及び歴史文化基本構想の検討委員である當眞嗣一氏を中心に、3名程度の委員からなるグスク関連遺跡を中心とした検討委員会を発足させる。委員会において、以下の内容を検討しながら遺跡調査を実施する。

- ・遺跡調査体制について
- ・遺跡調査対象地と優先する現場
- ・遺跡調査方法
- ・遺跡調査スケジュール
- ・その他

#### (2) 上里遺跡周辺遺跡調査の候補地

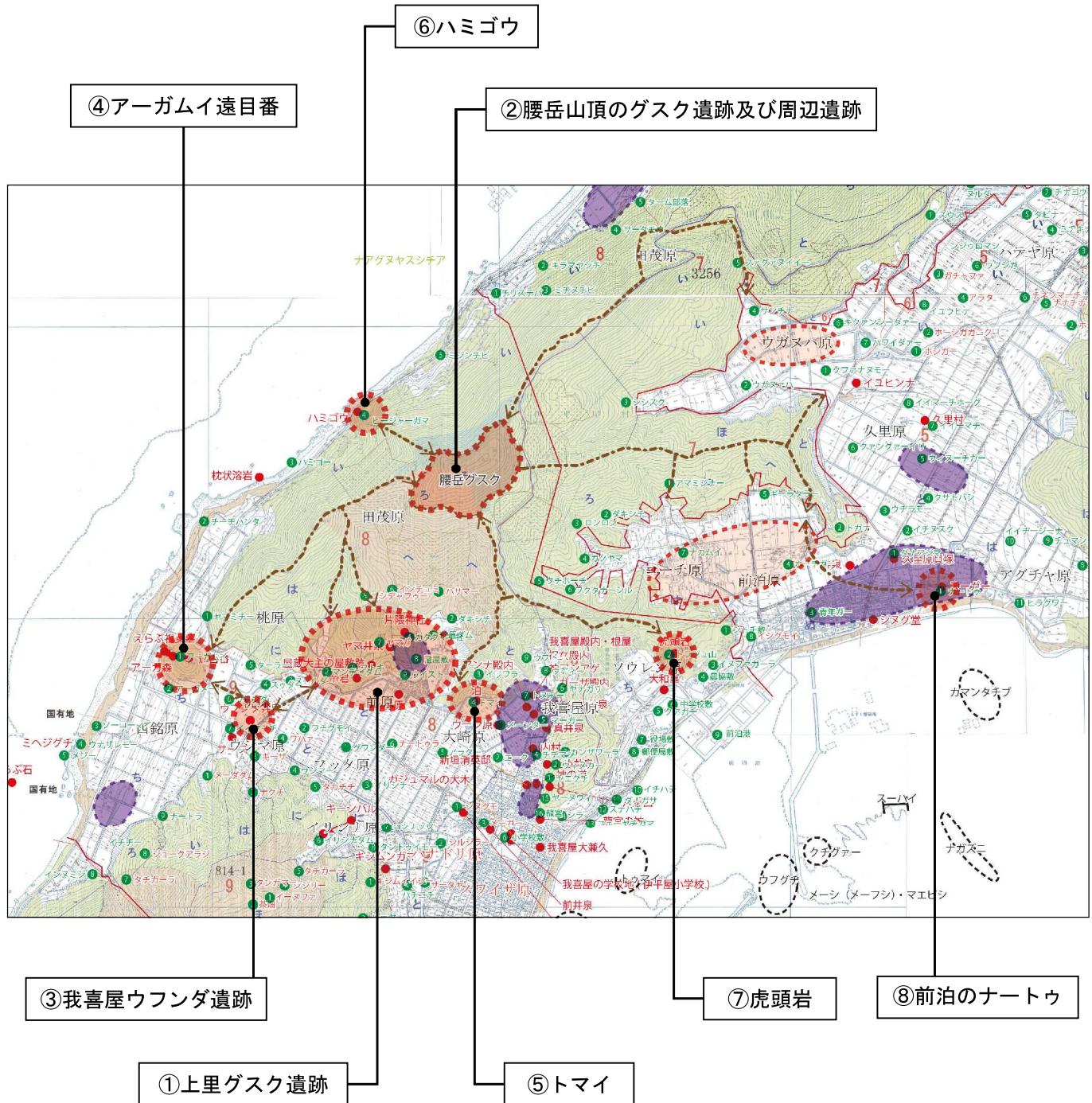
伊平屋島・野甫島の文化財悉皆調査において新たに存在が明らかになったグスク関連遺跡を含め、以下のグスクを優先とした遺跡調査が候補となる。

- ①上里グスク遺跡
- ②腰岳山頂のグスク遺跡及び周辺遺跡
- ③我喜屋ウフンダ遺跡
- ④アーガムイ遠目番
- ⑤トマイ（ハル名）
- ⑥ハミゴウ
- ⑦虎頭岩
- ⑧前泊のナートゥ（ハル名）

#### (3) グスク周辺遺跡調査

- ・賀陽グスクと周辺遺跡
- ・田名城及び後岳周辺遺跡
- ・ヤヘーグスクと周辺の海中調査

## 遺跡調査優先区：「琉球国の兆し」保存活用区域



※注釈：トマイ、ナートウは原名（ハル名）

### 3) 活用に向けた取り組み

#### (1)歴史民俗資料館と歴史文化保存活用区域との連携強化

伊平屋村の歴史民俗資料館と歴史文化保存活用区域の連携を強め、相互の情報ネットワーク形成を図る事が課題である。

#### (2)利活用の促進に向けたガイドブック等

伊平屋の歴史文化資源の活用に向けて専門家の指導のもとに「伊平屋島・野甫島歴史文化ガイドブック」を作成し、ガイド養成や学校教育などにも活用を図る。

### (3) 村民参加型の活用計画立案

各集落に関係が深い歴史文化保存活用区域では、地元の意見を十分に出し合い活用計画を立案する事が重要である。また、関連の印部石や山々に隠れている石積み、陶磁器類、碇石などの海中遺物は発見に村民の協力を求め村民参加型遺跡調査が望まれる。

## 4) 他事業との連携を図る歴史文化資源の保全と活用

### (1) 村のイベント

腰岳を中心にコース設定されたビレッジトレイルは、腰岳頂上遺構地区や上里遺跡周辺などを通過しており、今後は考古学の専門家の指導を受けながら活用企画を立てるなどの調整が課題である。

### (2) 伊平屋ちむドンキッズ

現代版組踊として伊平屋村の子供達が演ずる「琉球王国始まりの島 屋蔵大主物語」は、構想の「琉球国の兆し」と密接に関係するものである。遺跡等調査成果に基づいた現場の多くの情報を子供達に伝え、大主を通して伊平屋の歴史や文化への興味を高める取り組みを検討する。

### (3) ほ場整備事業等

ほ場整備等の土地改変を伴う開発行為計画では、遺跡調査検討委員会との協議体制を整備する。

## 5) 歴史文化基本構想の先行事業区の取り組み

### (1) 念頭平松公園を起点とした杣山地区

国指定念頭平松は琉球国惣絵図に見る近世琉球の歴史文化を想起させる場所で、関連する歴史文化資源が周囲に点在する。また、近接する田名城は県指定史跡の申請手続きが進行している。このような背景から、「大田名節に詠われた美しいシマ」保存活用区域における念頭平松を中心とした一帯は、具体的な活用計画を進めることのできる段階に入っている場所である。

現在、国指定念頭平松の公園改修検討が進行中である。念頭平松は大田名節に詠われ、背後には杣山となったタンナ岳や後岳、田名城や旧ガジナ村、タンメー岩や一矢付の窟などの歴史文化資源が豊富な場所である。公園改修では歴史文化基本構想との関連性を持たせ周辺資源とのネットワーク起点となるような位置付けが求められる。

念頭平松や田名城などの指定文化財と周辺の一連の関連文化財を群として連携し、歴史文化基本構想の先行活用区として位置付け、観光利用の多様性を広げる取り組みを検討する。

### (2) 田名北部の島の成り立ち保存活用地区

田名北部は島の成り立ちを理解する上で地質時代の多くの資源を有し、また、天然記念物のクバ山やクマヤ洞穴、ヤヘ岩等の指定文化財や神話伝説も豊富である。一方、利活用を推進する上では道路やトイレなどの施設も整備されている。

今後は、2億5千万年を遡るメランジュ等の地質時代資源も指定しながら、専門家の指導の下に「島の成り立ち」という視点での保存活用計画を立案する事が望まれる。

### (3) 文化財情報を告知するサインの設置

村内に存在する多様な文化財への誘導や解説サインを検討整備し、周知・保存活用に向けた取り組みが必要である。

## 6) 指定に向けた取り組み

現在、田名城は県指定の手続きを進行中である。腰岳アーガムイにある遠目番や賀陽山火立て屋、野甫島チジ石、建築の灯台、天然記念物の田名北西海岸部にあるメランジュを候補として、文化財指定による保存活用を図る。

(1)国指定遠目番ネットワーク

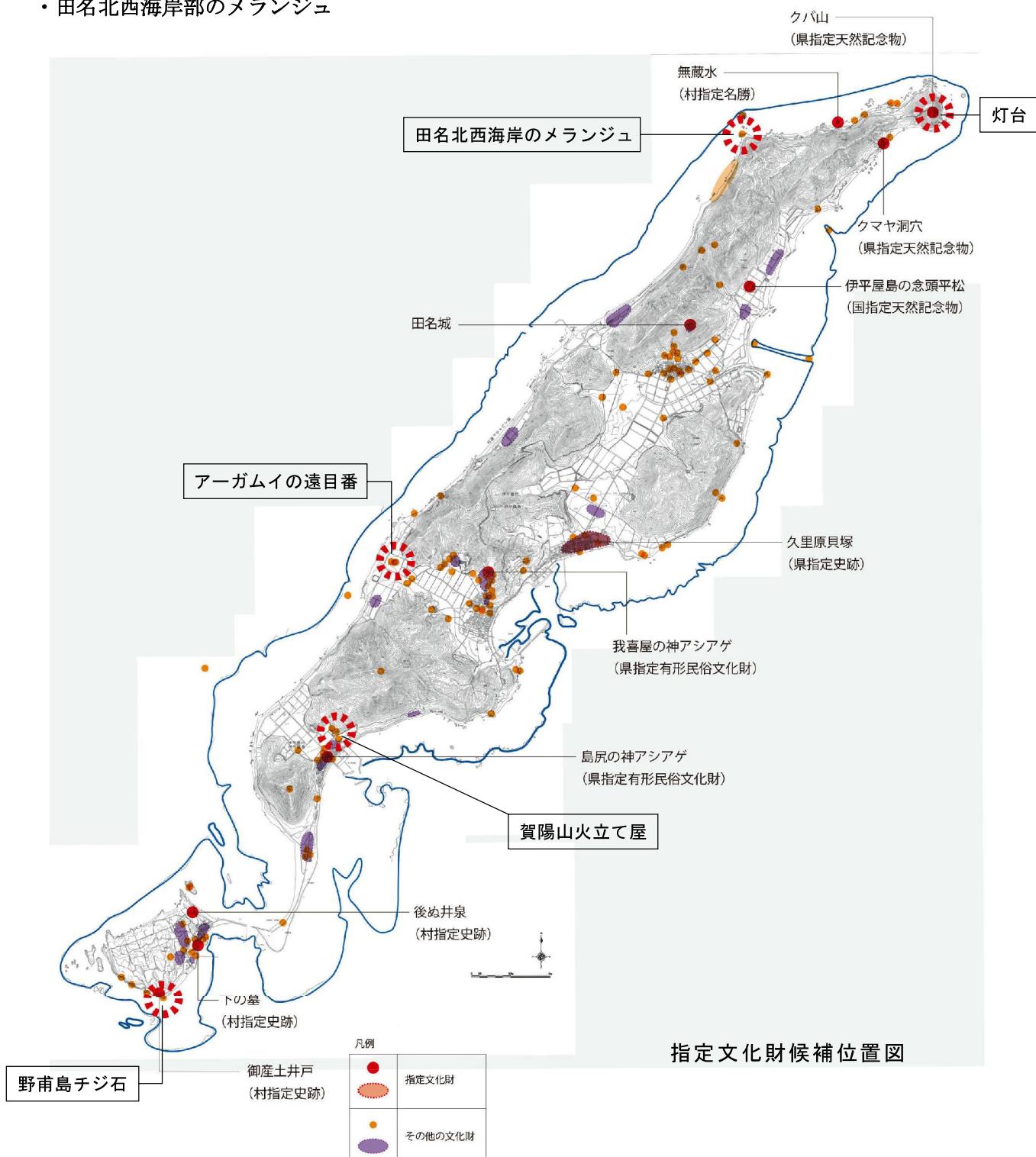
- ・腰岳アーガムイの遠目番
- ・賀陽山火立て屋
- ・野甫島チジ石

(2)建築

- ・灯台

(3)天然記念物

- ・田名北西海岸部のメランジュ





## 資料 編

### <委員会議事録>

1. 第1回策定委員会	91
平成28年2月5日（金）	
2. 第2回策定委員会	103
平成28年3月7日（月）	
3. 第3回策定委員会	110
平成29年2月7日（火）	
4. 第4回策定委員会	123
平成29年3月7日（火）	



## 伊平屋村歴史文化基本構想策定業務 第1回策定委員会

日 時 平成28年2月5日（金）

出席者 伊礼清委員長（副村長）

當眞嗣一委員、安里建設課長、野甫農林課長、上江洲推進室長、名嘉教育課長

嘉手納知子、西藤優三（伊平屋村歴史民俗資料館）

山口一樹、新里栄太（（有）MUI 景画）

委員長挨拶 伊礼清副村長

資料説明 事務局（嘉手納）：歴史文化基本構想の説明

<南城市歴史文化基本構想について>

當眞先生：なぜこういう歴史文化基本構想が出てきたかという事ですが、皆さんもご承知の通りこの前、念頭平松が国指定になり、県指定だったのが国指定にあがってきました。文化庁が今まで単体で、例えば念頭平松1つ、それから田名グスクを県指定にしたいという申請書が今県に上がっていて、私は審議会の県の会長をしているものですから審議長なのです。そうすると、指定は出されていないけれども審議をして答申をやったら指定されることになるわけですが、これはまた単体になるわけです。そうすると、文化庁自体が国の文化財保護行政を取り扱う場所ですから、今まで単体でやると、どうもお役所がこれは大事なものだから守ろう、守りなさいという形でやってしまう。地域の皆さんにとってはいったいどんな特になるのだろうかと。負荷だけかけられるわけです。「これは大事なものだから、あなた方は守るんだよ」というようなシステムであったわけです。指定するというのはそういうことです。網をかけてここは開発はいけない、こうやってはいけない、という事で守らないといけない。そうすると文化財というのは何かお荷物みたいにしかならない。保存管理とよっしちゅう言っても、地域の皆さんのがこれを愛して「ワッタームンだろ」といってみんなでまちづくりにこれが反映されないとダメじゃないの、という考え方へ変わってきたのです。今まで保存管理というふうに言葉を使っていたのですが、最近は保存管理だけではなく活用に入れる。つまり、保存をしたらこれを活用しなければ長続きしません。例えば自分の家に宝物があつてこれを筆筒にしまい込んでいたら、いつしかカビてしまって誰も見ないうちになくなってしまう、そういうような発想がでてきたわけです。そういう事から、むしろそういう事を脱皮して文化財を単体で今まで保存しなさい、あるいは保存しましょうだったが、この文化財を取り巻く地域の皆さんと、これだけではなく、なぜこの念頭平松がここにあるのか。これはここにムラが昔あった、それからその人々が植えたかもしれないし、愛してそのような素晴らしい松に育ってきた。実際には密着している。そうすると念頭平松を一番愛している人は地域のみなさんで、わかる人も地域の皆さんだから、念頭平松にプラスしてこの地域の皆さんのが想いとか、今までの歴史もすべて含める。さらにもうちょっと伸ばして、今度はここに育まれた地域のムラは海との生活がありました。海の豊漁をもたらした。そうすると砂浜がある。そういうような景観が守られてきたわけです。それも全部一体になって念頭平松はあるのだから、こういうようなものを1つのまとまりにして物語を作つて、みんなでやって、それを今度は村の活性化につなげていきましょうというような発想から歴史文化基本構想が出てきたわけです。そういう発想を基にするわけですから、今まで皆さんのがやってきたのは単体の文化財の意味。先ほど委員長がおつしやっていた宝。今まで宝があったけどわからなかつたわけです。その宝さがしをこれまでやつてきたわけです。



よね。それをつなげていって1つの地域とまとめて保存し、それをまちづくりにPRして活かしていきましょうというのがこれの趣旨です。

文化庁は初めての計画だから、モデル地区を日本全国で15カ所程手を挙げてもらって、南城市は手を挙げたのです。たまたま47都道府県の中でも市町村がたくさんあるわけですから、そこで南城市は手を挙げたら選ばれて、モデル事業としてこれをやったわけです。そうしてこういう報告書が出てきた。私も委員をしていましたから、皆さんのような行政の課長さんとか、学識経験者の皆さん、地域の皆さんのがいろいろ議論をして物語を作つて、もちろんその物語を作る前に単体としての文化財、宝ものを全部調べ上げてそれを物語にして作った構想がこれなのです。

今度は西原も、こっちがこうやっているからではなくて、新しい教育長さんが議会で追及されたわけです。あの文化財、この文化財はどうなっているのか、内閣御殿はどうなっているのかとか。これを守つてもどのように地域住民に還元されるのと追及されて、教育長は困ったわけです。私も西原町の審議会の委員長をしていますから、議会の答弁で困っているが、私の考え方としては議員さんから言われるよう文化財は単体であつてもまちづくりに活かされていないので、どうにかいい方法がないかと（教育長からお話をあり）、まさに基本構想がありますよといつて今年から西原町がスタートしました。

南城市はモデル事業ですから、伊平屋は沖縄県では1番です。勇気があるねと、私は嘉手納さんをほめたんです。まだこれは試験的なケースでやっているから、大丈夫か？と言ったんですが、やりましょうと。西原町は伊平屋がやっているとかいう話はまったくないです。教育長が議会で追及されて自分の発想として、文化財は今まで点々とやって網をかけて守れ守れと言っても、地域とはどんな関係があるかというのしか出ない。それで、点である宝ものを調べ上げて1つのテーマを持った物語にして、それを基にしながらみんなまちづくりをしていく。もちろん、こういうふうに作った基本構想は上位の条例、皆さんの場合は景観条例とかがありますが、そういうものと連携をする仕組みにしないといけないです。教育委員会が主体になった基本構想だけ一人歩きでは、村全体としてはあまり意味をなさないから、いろいろな条例で連携をしながらやればいいまちづくりになるのではないか、そういう事なんです。そういう事で、モデル事業以外で1番に伊平屋が手を挙げて頑張っている。私としては非常に敬服する、そして西原町が今年から入った。恐らくこういう事業が各市町村で手を挙げてやつていくんじゃないでしょうか。

伊礼副村長：行政側が事業をしていてもよく感じると思いますが、まとめる段階で歴史などが出てくるが深みがない、わからないものですから、まだ調査されていないものもあり、なかなかそこまで踏み込んで歴史文化を語って、どういう位置付け理由付けて物事を進めていくかというのがこれまで弱かったということがあります。悉皆調査の時に當眞先生がおっしゃったのは、なぜこの（琉球の）グスク群が遺産に登録できたかは生活に息づいて活用されているからという事、グスクだけの話ではなくて登録できたということだった。我々がずっとやっているのはすべて関連しているという考え方です。なかなか山を見ることができない状況で、単体で木しか見ていないという事になりがちですから、全体を見て語れる、考えるという方向付けの基になるものが基本構想だらうと思っています。

#### MUI 景画 山口：追加調査；チャートを基盤とする島の成り立ちと歴史文化について説明

##### <むらづくりのための歴史文化基本構想>

當眞先生：それを歴史文化基本構想を作つて、いったい村の活性化にどうつながるかというような事を言いたいのですが。例えば、我々が見ているヤヘーの海岸線があります。それはただきれいでよく残っている海岸線としてみんなは見えています。だけどそこにプラスして、この海岸線はどこでも見られると皆さんはそう思うけれども、実はそこに出ている岩石は。。。大陸のプレートの中に別のものが沈んではねたときに大地震が起こるというようなプレートの話は今の人達はみんなわかると思います。こここの先端部に潜っていく先端部にある付加帯がこれなんです。だから地球の、あるいは沖縄の成り立ちがわかる場所を我々は海岸線として見ているんですよ、という

説明を加えることによって単なる海岸線ではないわけです。つまり北部で見られる海岸線をただ歩くのと、伊平屋にきて海岸線を見るとではこれにプラスされているわけですから、これはもう伊平屋に行って海岸線を見た方がいいというふうに最終的には活用に活かされるのではないか、そういう事につながるわけです。

事務局（嘉手納）：沖縄奄美諸島の文化圏の接点について説明

伊礼副村長：調査したのは久里原貝塚という事でいいですか。

當眞先生：発掘調査を久里原貝塚と東ガジナはやっています。

安里課長：東ガジナも土地改良が入る前にやっています。

當眞先生：本格的な調査は東ガジナと久里原貝塚、あとはちょっとした調査です。

安里課長：田名の西の方でたまたま畑の斜面を掘つたら出てきたという事で、そのまま今、野ざらしの状態になっている所が1ヵ所あります。それと野甫です。それは20年程前の話です。

當眞先生：歴史文化基本構想にのせるとすれば、沖縄のルーツを考える場合伊平屋をスパイクはできません、という話なんです。伊平屋を通り越して飛んでいってはいないという話です。これは非常に大きなポイントだと私は思います。伊平屋を飛ばして本島が栄えたという事はあり得ません。元祖になります、という話ですよね。

MUI 景画 新里：第一尚氏の祖、屋蔵大主に関する調査について説明

伊礼副村長：伊平屋・伊是名はよく第一尚氏、第二尚氏と言われているのですけれども、第一尚氏の先祖という事で簡単な文献はあるけれども、なかなかこれまでこういったものに伊平屋村が関心を示さないというか、はつきりしていないという事もあったかと思います。そういう意味ではこの流れは本当にわかりやすいと思います。確認したいのは、どこまでが史実というか歴史書に残っている事なのかというのはどの辺を見ればわかりますか。

MUI 景画 新里：18頁の図、文章の出典は佐敷の村史や字誌、むかし話、つきしろの神々（第一尚氏系統の方の著書）という本です。

伊礼副村長：琉球の歴史では定説としてはどこまでが史実としてできているのか、當眞先生、その辺りはどうでしょうか。

當眞先生：沖縄の歴史そのものが、今はほとんど中山世鑑を基にしています。中山世鑑そのものが1つの政治的なセンスで書かれているものですから、本当にこれが正しいのかというようなものは歴史研究の分野になります。私たちのむらづくりでは、伝承は伝承としてパッケージとしてやって、これが本当に正しいのか正しくないのかという判断は我々の世界ではない。我々はむらづくりのための歴史文化基本構想ですから、伝承は伝承として1つパッケージとして構想を立てようじゃないかという事だと思います。本當かどうかというのは歴史研究家が議論することですので、そういうふうに理解していただければいいと思います。

南城市は、民と農業の始まりという1つのくくり、パッケージを作っています。本当に農業は南城市から始まったのかと、白黒つけなさいといったら誰も白黒つけられないです。では、なぜこういうふうに書いてあるかというと、受水走水とか稻の発祥がむこうであるという伝承が残っているからこれを大事にしてむらづくりに活かそうと、だから私たちが農業の始まりだ、これは伝承ですという事を言っているわけです。

そういうようなことを我々は今歴史文化基本構想でやろうと、白黒をつけようという事は大学、研究者に任せましょうというふうに理解してもらえばいいと思います。

伊礼副村長：琉球の歴史というのは戦争でほとんどなくなって、中国に残っているものを基に調査したりしているのがありますね。この位置付けというのは先生から聞いたような、その方向だろうと思います。

#### <屋蔵大主屋敷跡と腰岳石積等現地踏査について>

當眞先生：今の延長でもっていきますと、屋蔵大主の屋敷跡と地元で伝わっている場所があります。屋蔵大主という方が本当にここに住んでいたかどうかを白黒つけましょうというのは、我々が及ぶ世界ではない。問題は、でもこういう伝承があるから伝承をむらづくりにどう活かすかという事を考えればいいです。伝承は伝承だが、彼らが腰岳をいろいろと歩いてみたらすごい石積があるんです。研究者である私が呼ばれて見たら、これは大変な石積で、つまり腰岳に何か有事の際に逃げ込んで迫ってくるものをシャットアウトしようという意識の基に造られた構築物があるわけです。

賀陽山もそうでした。あんな高い山にただ石垣がある。すぐこれを屋蔵大主と関係付けて、あれは屋蔵大主が作った城じゃないかと、ただそれだけの話だったのですが、この伝承を裏付けるために賀陽グスクがあるのではなくて、賀陽グスクを調べてみたらちゃんとした城があるんです。城は城としてあります。あんな高い山にああいう立派な石垣、見ればあるとわかりますから。では屋蔵大主と本当にこれは屋蔵大主の城かどうか、決着を付けるのは研究者の仕事で何十年かかるかわかりません。だけれどもむらづくりではこういう物をパッケージにして1つの構想、物語を作り上げれば村の宝になるから決して相反発するわけじゃなくて、本当のもの、伝承をいろいろ組み合わせながら構想を作っていく素材になるための話、調査なのです。

私は私で現地踏査なのですが、屋蔵大主の屋敷を本当にここと白黒つけに来たわけではないです。白黒つけるためには発掘調査をしないといけない。もっとたくさんのお金をかけないといけない。けれどもみんなが見過ごしていた腰岳、賀陽山のグスクみたいなもの、でもはっきりわからないというのは、これはもうはっきりグスクです。伝承とも関係ない。その伝承と本当の事実をいかにして結び付けていくか、素材をここにやっていますというのを理解していただきたい。

具体的には腰岳に本当に？というのであれば皆さんをご案内して私が説明をしてもいいです。

伊礼副村長：今ご説明いただいた話も、パンフレットにある通り関連づいているという事。起こるべくして起こっているというこのつながりを紡いでいくという事だと思います。

MUI 景画 新里：琉球王府時代の杣山竿入帳について説明

伊礼副村長：王府時代に杣山制度というか、琉球全体にやられているのが伊平屋の帳簿だけが残っているということですね。

#### <行事や杣山竿入帳と印部石>

當眞先生：竿入れというのは自分の土地を図る、この山は自分のものだという場合に図面を書かないといけないわけで、その図面を244年前に首里王府がやっているわけです。その帳簿、伊平屋島の帳簿だけが京都大学に残っている。あとは杣山以外の田畠とかいうのは写真で残っていたり、ただ図面だけ残っていたりしかしていない。原簿が残っているのは伊平屋だけである。その原簿を写したマイクロコピーは今琉球大学にありますから、伊平屋にもぜひこのマイクロコピーを持ってくれば、伊平屋に来れば昔の測量方法が全部わかりますよという話につながります。

1番大事なのは、ここでは帳簿は残っているが図根点がまだ1本も見つかっていない。西原では図根点だけ6本か7本見つかっています。けれども原位置では立っていない。ある地域では隣むらの図根点を御嶽において押んでいる所がある。それぐらい244前のものだから。そういう状況ですからこれも非常に宝ものだと。さつき嘉手納さんが言ったように、自然環境保護区域というのは今に始まって残されているのではなく、244年前に測量されていてこういうふうにきちんと残っているから、これを守っていくべきだろうということにもつながります。

伊礼副村長：ある意味ではその当時の時代背景からすると山が財産という感じですからね。

當眞先生：印部石を探せばこれはまた新聞社が飛び込んできます。

安里課長：この位置をみるとカドバルのダム近辺はほとんど手付かずだから、向こうに3点ぐらいあるかなと思いました。

伊礼副村長：当時の竿入りのデータとCADがある。これから注意して、場所によってほとんど手を付けていないという所がありますから、見てみれば。ああいう石であるんですよね。

安里課長：もしかしたら石敢當として使っている所があるかもしれない。

當真先生：裏を見て、字が書かれているかどうかです。

伊礼副村長：島にはニービはないから持ってきていたるかもしれない。

#### MUI 景画 山口：琉球国物絵図に記された歴史の道について説明

當真先生：歴史の道事業というのが文化庁であって、恩納村では喜納番所から多幸山を通って仲泊の一里塚まで行く歴史の道が、国が補助金を出してみんな土地買い上げをして、そこを歩けるようにしてあります。つまり村おこしに使っているわけです。また浦添市が、1609年に島津がやって来た時の王様、尚寧王は浦添グスクにいて（首里に）呼ばれるのだが、自分のウヤファーフジがいる所に通うのに道が悪いという事で道を直したという記録があるので、その道を調べ上げてみんな石畳だった所は石畳にする、今度の戦争で壊れたのを文化庁の補助金で復元をする、そういう事でむらおこしに使っています。そういうような浦添や恩納村の場合に線形が結構変わっていても、文化庁から宝ものだという事で補助で1億近いお金を、中城村は2億近いお金を出してやっています。伊平屋の場合は（道が）ほとんどオーバーラップしているから、これをどうにかPRする手があるんじやないかというのが1つの宝ものという事になります。

#### 質疑応答

##### <島の成り立ちからのストーリー>

伊礼副村長：これから質疑応答をやっていきたいと思います。

始める前に私が感じたものを話したいと思います。今回はジオの面から尾方先生の聞き取り調査等が入ってきております。私もこれは大賛成ですが、実は伊平屋を語る場合に第一尚氏とか第二尚氏とか単発でといいますか、その辺だけで話が上がったりするのですけれども、そうではなくて伊平屋島は地質的にもかなり独特の地域であるという事を、2ヵ年ほど前に本部半島のジオパーク推進協議会に加入しようかどうかという事でやっていました。とにかくこれは相当有効だというふうに考えたのは島の成り立ちから話をしないといけないと、なかなか自分たちの島を語れないだろうと思ってずっと考えておりました。第一尚氏、第二尚氏この程度ではどうだろうかと思っていて、ぜひとも今のストーリーで島の成り立ちから、付加帯もこの中に出てきますが、あれを考えると大陸のそばにあったであろうとかいろんなことを言われています。そういう意味からすごい貴重だという事だと思います。そういう島の成り立ちから始まってやっていくと、ダイナミックな伊平屋島の事を語れるのではないかという事で、ぜひその辺をやっていけば現在に至っている伊平屋島の重要性といいますか、貴重な島というような位置付けができるのではないか、という感じを持ちました。

急ぎ足で資料説明してきましたが、質疑応答方式でどんどん深めていきましょう。

伊礼副村長：ジオの事に関しては、海洋学者の中では伊平屋沖の熱水鉱床とかいうものは当たり前に通じる話らしいですが、最近ようやく新聞紙上でも取り上げています。それとのつながりなどは、ジオの段階で取り入れできないかと思っています。先ほどのちょっとしたポンチ絵の中にも海底火山があるとかありました。最近宮古の話も出ましたが、そういうものの類で島の成り立ちを語るのもどうだろうかなと思っています。

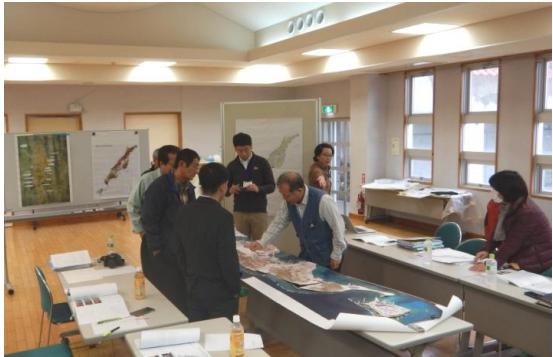
—休憩中—

當真先生：今のジオパーク構想にこれはつながっていきますね。ただ、もうちょっと調べてもいいですね、今の

熱水とか、よく新聞にも出てくる。そういうものが伊平屋との関わりも出て、その辺りまで地質を調べると、面白いかもしれない。そういうのをやりながらジオパークに結びつけて村の活性化につなげる。おもしろいのは歴史文化だけじゃない、やはり自然。自然が豊かな所はやはりそういうところは。非常に良い構想ができるのではないかかな。

伊礼副村長：ジオの話も、なかなか、山は樹木で覆われているものだからぱっと見はなかなかできないけれども海岸線にそういう物が残っている。熱水鉱床といつて何かの地図にそこを入れるとか。相当インパクトになる。伊平屋のものは前から相当有名です。

當眞先生：熱水が出るというのは近いんですか？　これは熱水鉱床といつて海底から・・。それもやっぱりこの構想の中に入れれば。構想というのは、各部局と連携をしながら、こういうものを軸にしながらどういう事業を引き出していくか、という感じですからね。



伊礼副村長：沖縄県が積極的ではないから国も一部しびれを切らした状況ですが。

當眞先生：これは県にも働きかけて、ぜひ伊平屋にと、歴史文化基本構想が出ていますといって。県はどこの部局が所管していますかね。土木建築あたりですか。(商工労働部かな)彼らにこういうのを突き付けて勉強させて、理由ができれば。

伊礼副村長：現状としては鉱床の埋蔵量がこれだけになったという事で、中国船が来てどんどん取っているらしいです。

當眞先生：こっちは大陸棚だから中国は有利なのです。パイプを伸ばせばできるんです。

伊礼副村長：サンプルなどとくに取っているらしいです。その辺も危機感をつのらして今、県にも訴えているんです。

安里課長：空港のものもそれが出ていて、伊是名、伊平屋の南西にあるレアメタル。伊平屋は伊平屋といったら、伊是名は伊是名っていう。

伊礼副村長：伊平屋は前からあるけど、最近伊是名も。我々の方を先にこれにポンとはめ込んで。

安里課長：この2番目の、琉球石灰岩だけがポンと1つ立っている所がある。他のチャートと違って琉球石灰岩だけポンと1つ立っているのがあります。あれも前に琉球大学の地質学の先生が見ている。それと、クマヤの東側の砂山と言われている所、今はだいぶ風化しているけれどもビーチロックというのがあって、あの高さにビーチロックがあるというのはすごい貴重なものだという。ビーチロックになりかけているのが西海岸にあるんです。あの山の中腹にあるのが非常に珍しいといわれた。ヤヘーの所にある。あれだけ全然色が違うんです。

野甫課長：化石石灰岩という言葉もありますか？

上江洲室長：化石石灰岩とは、示準化石とか指標化石の事を言っているのでは。フズリナとか入っている。

安里課長：墓標みたいに出ている。それを末吉ミナオが地質学的にどうこうと随分話していた。ヤヘーの道路の舗装されていない部分の左手に立っている。

さっき言った印部石、かどばるダムの周辺に結構。かどばるダムの周辺は手付かずになっているはずだから。

—再開—

事務局（嘉手納）：腰岳、片隈神社、上里遺跡を含めてパッケージというイメージのお話しを、當眞先生にお願い

します。

#### ＜屋蔵大主と関連させたパッケージの検討＞

當眞先生：宝ものをただ単体で宝ものですと言つても、あっちにあれがありますとかわかつても、これは結び付けて何か村の活性化とか、皆さんはマラソンのコースに走るというものに付加して、皆さんのが歩いているのは單なる北部の山並みや海岸線ではなく、こういう地球の構造がわかるような所を歩いているんですよ、というようなものも付け加えればものすごいプラスアルファになるわけです。そういうものの基礎作業をしましようという事が歴史文化基本構想です。私がいつも思うのは、例えば片隈神社と今は言っていますがあれは国家高揚期に神社になって、本当は片隈の嶺といった方が沖縄的です。沖縄には神社というのは戦前、我々が生まれた頃に国家高揚期になって神社に変えているんです。片隈の嶺があつてその周辺に屋蔵大主の屋敷跡とか藏跡だとかという伝承が残っている。これが本当なのかどうなのかをやついたら何百年後になるかわかりませんから、一応伝承が残っている。でも更に調べてみると事実として上里遺跡。昨日調べました。あれはよく残っている。駐車場になった所ですが、実際どこに残っているかというと、駐車場で平坦になって潰されているみたいだが、周辺にはちゃんとそこに登らせないような仕組みが作られている事が今度わかりました。そうすると、これは屋蔵大主と関係するかどうかは学問的な世界ですから、我々は屋蔵大主がいたらしいという地域、片隈の嶺をつなぎますと、今度はこちらに登ったんです。

(模型で説明) これが腰岳です。皆さんは高い山という認識しか。賀陽山はちゃんとハチマキがあるからよくわかる。これは(腰岳?)面白いことに巻いてはいけないです。ここは断崖で人が来ないから巻く必要がないです。草をちゃんと刈ってよく見えるようになっていますが、石垣がちゃんとあって人がこれから入ってきたら追ってくる人をシャットアウトする構造があるのです。ここも、これから人が入ってきたらシャットアウトする石垣がちゃんとあるんです。なんでこれがこうあるのか、という意味はわからないでもいいんです。屋蔵大主の伝承などとくつづけ、例えば物語としては屋蔵大主と関連遺構群という形でやると、今皆さんはここに遊歩道を作つて何かコースに入れてあるでしょう、こういう伝承や事実をパッケージにして、单なる山道を歩くコースではなく琉球王国のルーツにつながるコースを歩いているのですというふうにする。つまり、その地域にしてしまつてここを歩くレースは、ここに冠をかぶせるわけです。例えば「第一尚氏発祥の地を走る〇〇」というふうにしてパッケージにする。そういうものに活かしながら、単体である文化財をみんなで愛着を持って守りましょうというのが歴史文化基本構想なんです。

ただトレイルランコースという山を歩くというのはあちこちあります。別のとは全然違う、皆さんのが歩いているのは史跡を歩いているコース、それも第一尚氏という琉球王国を作った元祖が生まれた所を走っているコースなんですよというPRをすれば、今は歴女もたくさんいますからね。そういう事のこれは基本構想につながる。次の作業はこれをどういうパッケージを作るかです。だから皆で知恵を出し合つて考えていきましょう、そのための検討委員会になるのです。今後検討委員会はどんどん意見を出し合つて。南城市は農業の始まりとかいって、これを本当かと言つたら始まらないわけです。そういう話になります。

私は昨日ここを歩きながら、ここは土取りですか？ここに立つたらローマの円形劇場のようです。これは、どうせ壊されているわけだからパッケージにすれば利用できると思いました。それは今度皆さんの施策の中でね。(島に元々あるツツジ) 单なるツツジの公園ではなくて、そういうものに結びつけてここを意味を持たせ、PRして人を呼び込もうという話です。屋蔵大主の屋敷跡も腰岳も入れてパッケージでつなげて。

腰岳の石垣は1日ぐらい2~3名で ぱつと掘ればすぐ見える。今立派に見えます。

(田名にアサ道ユナ道とあり歌に唄われている) そういうものとパッケージにして伊平屋散策コースとか作ればおもしろいんじゃないかな。いろんなアイディアの基にしましょうとか、歴史文化基本構想のものと役所の各課の働きですね。

名嘉課長：前原ダムの沢からの拝所は行ったことがある。前原ダムから上がって沢の方。

當眞先生：これもちょっと歩いた方がいい。

名嘉課長：前原ダムのこっちから行って、沢を登って、ここから上がった。どこかに広っぱがあつて石で拝所があった。

伊礼副村長：これまで構想の概略として資料の最初から一通りやってきましたが、1回ではなかなかわからないと思います。イメージとしては目の前に模型も作られて、できるんじゃないかという事です。それと中身。

時間が限られているのでお一人ずつ今日の資料や興味を持った事、これと関連付けてできそうだ、というものを3分程度聞いて、最後に先生からまとめや講評などをもらえばと思っています。

#### ＜各課からの委員会資料に対する意見＞

安里課長：大変興味深い話で良かったです。それもありますが反省もだいぶありますし、物を作ってきた立場で、副村長のあいさつでも話がありましたが、事業を遂行していく中で文化財的な価値のあるものについての考え方があつた感じがします。特に感じているのは、私が以前教育委員会にいた時に民話集の編集や写真で現場をいろいろ回るたびに後悔の念がありました。民話に残っていた風景がほとんど平地になってしまった。それを私がやったわけではないのですが、そういう後悔の念がありましたので、それを守る側になってみて更にそれが増したという感じがあります。

今、野甫地区では空港の問題など事業を進めている最中ですが、野甫区にも大変重要な歴史的価値のあるものがたくさんありますので、その保護も含めて野甫地区を1つのパッケージとして位置づけできればと、今日のお話を伺って頭の整理をしようかと思っています。一度壊してしまうと元に戻せないものがいっぱいありますので、大事に守っていきながら構想を練っていけれどと思います。

伊礼副村長：ありがとうございます。我々はこれまで「知らなかった」というのが一番の事ですから、冒頭話しましたように弱かったところという事ですから、これからはかえって活用するという意味からすればいろんなアイディアが膨らんでいくと思います。

野甫課長：資料を見ますとだいぶ細かくできています。私も知らない所がたくさん出てきて大変勉強になっています。

検討委員会はずつとこのメンバーでやっていくのですか。ぜひメンバーを何名か増やしていけばもっといいと思います。

悉皆調査ではかなり細かく調査されていますので、報告書で係にも知らせてもらってその意見も取り入れたらうまい構想ができるのではないかと思います。

委員会メンバーも増やしてもらって、何回かやってもらいたいです。

この事業は平成27～28年度ですか？

當眞先生：文化庁としては、こういうものを教育委員会が策定。これを実施するというのではないです。文化財を今まで保存の事だけを言っていたのだが、活用を図るために地域ごとのストーリーを作つて、つまり基本構想という1つの冊子にして全町村に配つて、また行政側は課長たちがそういうものを基にして集まって自分たちの事業にどう活かすか、そういうところの1つのスルーパス点。最終的には本を作るわけです。そうしないと、考え方だけ話してもここにいる人たちだけしか共有できません。構想に基づいて各部局がいろんな展開ができるのです。

野甫課長：若干人数も増やして意見を収集して構想ができるようにしないといけないわけですね。

當眞先生：基本構想の検討委員会でもどちらでもいいと思いますが、こういう基本構想を冊子として作る委員会は多い方がいいです。その場合に行政側の皆さん方、地域代表の方。南城市の場合は行政の委員、学識経験者はあちらの場合は発祥の地だという言い伝えもあるから、民俗、歴史、考古が入りました。伊平屋はどうするか、

委員長のおっしゃったように地質を入れてもいいし、それから地域の皆さんの代表、そういうふうに構成されていました。

野甫課長：今聞いているのは単年度ではない、私は2カ年かけて策定するものと理解しているけれども、それでいいのですか。

當眞先生：策定（=計画をまとめる、本まで作る）2カ年でできますか？今宝もの探しの段階だから、これをどういうパッケージにするかここで話し合うんですよね。

伊礼副村長：構想のテーマとして1から6まであるのがおおまかなテーマということですよね、計画書の中の。それは平成27年、28年で整えるということですね。

上江洲室長：今日はとても勉強になりましたが、何点か聞きたいことがあります。南城市は平成20年から取り組みをして7、8年経っていますが、それに対しての成果などはどうなっているのか聞きたい。文化財を点から線にして、それを広く住民も共有し、うまく活用することによって様々なストーリーを膨らませていきましょう、保護だけではなくそれを活用していきましょうというところで、南城市はそれを使ってどういう取り組みをしたのか、どういった問題が出たのかを聞きたい。イベントや観光をやる際に、どうしてもそこ（文化財の場所）に入るけれども、どの辺でラインを引いているのか。ここからは入ってはいけないとかいうのが明確にあるのかどうかなども知りたいですし、観光振興総合計画の中でも、「伊平屋村の検定」をしましょう、伊平屋を知って検定をしてそういったものをうまく事業展開しましょうとかやっている。我喜屋集落の60才以上の老人会の方でユンタク会を実施する中で、伊平屋村民大学を設置してもらいたいという意見が出ていました。自分たちが知っているものを後世に伝えたいと、そこでストーリーをうまく膨らませて島に来た方や子供たちにつなげていきたいのだけれども、その手法があまりよくわからないという事だった。同じような問題が観光協会の案内の中ででも出ている。島を散策する方がいて、民家さんやガイドさんがいるが話すストーリーに対して年代が全く違うとか、齟齬（そご）が出ている状態が今あって、この人からはこう聞いたが、別の人には違う歴史検証方法があつたりして、実際はどれが本当なのかというのが、去った伊是名・伊平屋・今帰仁のツアーの中で同じような問題が出ていました。歴史文化基本構想が冊子になって出ると案内する時のガイドラインになって、それをまたツアーをする方が自分たちの色にしてストーリーを少し膨らませたりできるようになるかと思ってとても期待しています。実際に南城市で取り組まれている成果や課題を教えていただければと思っています。

「月代の神々」というのは村でも見ることができますか。いろいろとひも解く参考文献として。

事務局（嘉手納）：資料館には置いてないです。

當眞先生：いつでも買えます。元新聞記者の當眞莊平という人が書いています。

事務局（嘉手納）：第一尚氏のことについて、一般の人が民俗資料館に来て見ることができたらもっと話を膨らませたり、勉強したいと思ったりする方が他にもいるかもしれないです。

當眞先生：買って置いておいたらどうでしょうか。古本屋にあって4、5千円ぐらいで買えます。

上江洲室長：これが現代文というか子供たちが読んでもわかるような内容だったらもっといいと思いますが、わからなければ注釈などがあればいいです。先ほど副村長がおっしゃったように、「何を根拠に」ではないですけれども、史実の中にもこういったくだりがあるからこうなんだよね、とわかるものがあると、観光客やもちろん子供たちにも説明しやすいし浸透すると思います。そのへんをちょっと教えて頂ければいいと思いました。

伊礼副村長：今の話は、文献は売っているという事ですね。

MUI 景画 新里：當眞莊平さんが書かれた書籍「月代の神々」の事について説明